



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道の産業振興とマス・コミュニケーション：八雲町大新青年学級の場合について
Author(s)	佐々木, 隆介
Citation	北海道大學教育學部紀要, 9, 35-63
Issue Date	1963-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29000
Type	departmental bulletin paper
File Information	9_P35-63.pdf



北海道の産業振興とマス・コミュニケーション

— 八雲町大新青年学級の場合について —

佐々木 隆 介

目 次

- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1. 研究の意図 | 関心 |
| 2. 研究の経過 | 9. マス・メディアとの接触状況 |
| 3. 八雲町産業の概況 | 10. 酪農振興とマス・コミュニケーション |
| 4. 大新部落の概況 | 11. 北海道ラジオ農業学校と大新青年学級生 |
| 5. 大新青年学級の実態 | 12. 総 括 |
| 6. 大新青年学級生の活動状況 | 13. 結 語—産業図書館の構想 |
| 7. 大新青年学級に対する学級生の意向 | あ と が き |
| 8. 酪農生産拡充5ヶ年計画に対する学級生の | 参 考 文 献 |

1. 研究の意図

現在はマス・コミュニケーションの時代であると呼ばれ、マス・メディアの氾濫が指摘されているが、このマス・メディアの教育的利用をはかることが、これからの重要な課題であろう。とくに北海道総合開発の進展にともない産業振興の必要に迫られている北海道にとって、マス・コミュニケーションの果たす役割は大きいものと思われる。研究の主題は「北海道の産業振興とマス・コミュニケーション」であるが、本稿では、とくに一つの事例として、酪農で著名な道南渡島の八雲町の一部落大新をとりあげ、働く青少年の学習の場である青年学級におけるマス・メディアの浸透状況と農業就中酪農の振興に対する寄与を検討し、そこから北海道の農漁村における青年学級、さらにひいては産業振興におけるマス・メディア利用の在り方に関する示唆をひきだしたいと考える。

2. 研究の経過

昭和35年に実施した研究、「北海道の中・高校・公民館等における産業図書の利用に関する調査」(北大教育学部紀要第8号)において、八雲町では中学校・高校・公民館が、そろって回答を寄せ、とくに八雲高校は産業図書数2,500冊(総図書数の35.7%)、八雲町公民館は1,012冊(総図書数の7.0%、内酪農に関するもの710冊)をかぞえ、且つその利用状況もかなり活発であり八雲町の酪農振興に寄与しようとする意図が明瞭であるこ

とを知ったのである。また今回の調査に際しては同町教育委員会の熱心な協力が得られたので、八雲町を調査地に決定したのである。

(1) 第1次調査

昭和35年6月八雲町に赴き、調査の下準備を行なった。もっぱら資料の蒐集と有識者、関係機関等の訪問に充てた。訪問先はつぎのごとし。

教育委員会、公民館、八雲中学校、町役場、農協(太田正治専務)、農業改良普及所(都築重雄普及所長)、漁協、保健所

(2) 第2次調査(昭和36年5月)

今回は、部落の選定作業に重点を置き、そのような面からの、聴取を行なった。訪問先はつぎのごとし。

教育委員会、公民館、八雲中学校、町役場、太田正治氏、都築重雄氏

調査部落は後述する理由から大新部落に決定し、その青年学級生を対象に調査を実施することとし、大新部落会館で同学級指導者の茂木英一、学級生細川昌隆、太田真樹夫、長谷川義敬の4君と面談して、調査について種々打ち合わせを行なった。

(3) 第3次調査(昭和37年1月21~27日)

大新青年学級生を対象に面接調査を実施した。併せて、教育委員会、公民館、八雲中学校、町役場(農業委員会等)八雲産業株式会社等において主として大新部落に関する調査を行なった。なお青年学級生調査の調査員は、佐々木隆介(北大教育学部)、茂木英一、坂本重幸、長谷

川義敬（大新部落）の 4 名である。

3. 八雲町産業の概況

(1) 農 業 の 概 況

「北海道農業地域区分結果概要」（昭和 34 年、農林省農林水産技術会議事務局・農林省寒冷地農業振興対策室編）によれば、道内の農業地域は 34 に区分されるが、本八雲町はその「道南東部」に該当する。この地区の特徴を略述すれば、地味瘠薄で、水田は全耕地の 1 割である。酪農家比率は 61.7 % で、根釧・天北地帯に次ぐ有数の酪農地帯で、3～4 頭飼養農家の占める割合が著しく高い。作物は豆類・飼料作物が主で、馬鈴薯・ビート麦類がこれに次ぐ。反収は全作物にわたり、道南地区に比し低水準である。完全に輪作を導入するまでには至っていない。今後は主畜経営の方向に進むべきである。八雲地方は酪農先進地であるが、ここでも馬鈴薯依存を脱却できずにいると指摘されている。

ところで八雲町は渡島半島に位置し、東は内浦湾に面し、西は連山が走り遊楽部岳に望む。北は長万部町、南は森町・函館市である。

八雲町は面積が 736 万坪で、人口は 26,000 人（昭和 36 年）を数え、創基 83 周年の歴史を有し、道南における一大中心都市となりつつある。戸数は 5,180 戸（昭和 35 年）であるが、そのうち農家は 1,038 戸（20 %）で、農家の 87.6 %（910 戸）は酪農家である。町全体の乳牛の数は 5,128 頭だから、1 戸平均 5.6 頭の乳牛を飼養していることになる。本道の平均は 1 戸当たり、ほぼ 3 頭であるから、八雲町農家の乳牛飼育頭数は極めて多いといえよう。

なぜ八雲町では酪農がさかんになったのであろうか。八雲は火山灰地で、何を作ってもよくできなかった。さらに気候が悪かった。米作できこえる上川地方にくらべて、八雲町の気温は低い。八雲町は春から夏にかけて、気温が低く、水稲はよく育たない。また 6 月から 8 月にかけて霧がかかり曇天が多く続く。そのため日照時間が少なく、稲のできがよくない。ところが牛の飼料である牧草は涼しい土地の方がよく伸びるし、乳牛は涼しい土地を好む。暑夏でも牛は牧草を多量に喰べ、多量に乳を出すのである。

その他の家畜としては、馬（950 戸、1,333 頭）、豚（308 戸、999 頭）、緬羊（329 戸、634 頭）、鶏（795 戸、22,687 羽）等がある。気候・土地が作物に合わないので、農家は家畜を飼養するようになったのである。しかし、最近では土地改良が進行中である。

ここで、八雲町農業に関する若干の統計を示してみよう。（資料 八雲町町勢要覧（昭和 36 年）、北海道市町村勢要覧（昭和 37 年））

表 1 八雲町の各種生産額 35.7.1（単位 千円）

区 分	農 産	畜 産	工 産	鉱 産	林 産	水 産	合 計
生産額	412,773	354,625	708,749	88,748	129,210	205,209	1,899,314

表 2 八雲町の耕地面積 36.7.1

区 分	総 数	作 付 地	不 作 付 地
総 数	5,470.80 町	4,953.51 町	535.49
田	274.62	259.37	15.25
畑	5,196.18	4,675.94	520.24

表 3 八雲町における主要作物の作付面積と生産量 35.7.1（単位 町・生産量 石）

	水稲	麦類	えんばく	ひえ	馬 鈴 薯	ビート	牧 草	デントコーン
反 別	211	115	348	284	435	364	1,762	575
生産量	3,549	1,758	5,562	6,532	2,740,500	8,010	61,670	19,550

(2) 酪農生産拡充 5 カ年計画

八雲町の農業環境は道央或は道南の一般地帯にくらべて非常に悪く、道南のエヤー・ポケット、特殊環境地帯であると称され、この環境の特徴を完全に活用する営農方法として酪農経営が採用されたことは前述したとおりであるが、一般的な畑作経営の中に牛を入れたという従来の八雲酪農の形に、合理性を与え、科学的な基礎の上に立って、企業的な経済性の高い、しかも安定した経営に導くことが八雲町農業振興の重点になってきたのである。

かくて、昭和 32 年、八雲町農業協同組合の手によって、「酪農生産拡充 5 カ年計画」の樹立をみるに至った。当時の計画は概要つきのごとくである。即ち八雲町農協関係の面積の約 9 % 弱（4,800 町歩）が可耕地でありここに約 750 戸の農家が 1 戸平均 6 町 5 反の割合で酪農経営を行なっている。そして数多くの作物が雑然と作られ、そのために多忙な日々の連続である。しかも生産は逆に少なく、1 戸平均 40 万円に満たないのが現況である。大略階層分類をすれば、つぎの表のごとくなる。（第 4 表）。この八雲の大半を占める C・D 級農家を速やかに引き上げようとするのがこの酪農生産拡充 5 カ年計画である。現在農業で生活するための最低の基準収入は反当 1 万円と見て 6 町 5 反で 65 万円は必要である。しかも近い将来の近代経済機構に対処するためには、100 万円以上の

表 4 八雲町農家の階層区分（昭和32年）

級 別	年 間 租 収 入	比 率	農 家 数
A 級	100 万 円 以 上	3	23
B 級	60 ～ 100 万 円	20	150
C 級	30 ～ 60 万 円	60	450
D 級	30 万 円 以 下	17	127

収入をはかる必要がある。故に5カ年後のB級6町5反歩営農目標を立てて参考に供する。この在り方が基礎になってさらに山林やそれに附随する傾斜地等に放牧地を造成し基本の6町5反歩の面積以上に土地利用度を拡充すべきである。なお1頭の搾乳牛に用意すべき飼料作物の面積と飼料の総量はつぎのごとくでありこの線を確認した時は1頭平均25石は可能である。この外に乳代の30%迄の濃厚飼料を用いるのが良い。（第5表）「酪農生産拡充5カ年計画」は以上のように述べている。

表 5 1頭の搾乳牛に用意すべき飼料作物の面積と飼料の総量

	エンシレー ジ用のデント コーンは牧草	家畜用 ト	乾 草	生 草	計
反 収	1,000 [㍗]	1,400 [㍗]	200 [㍗]	1,200 [㍗]	
面 積	1.5反	1反	2反	2.5反	7反
総 量	1,500 [㍗]	1,400 [㍗]	400 [㍗]	3,000 [㍗]	

4. 大新部落の概況

(1) 大新部落選定の理由

今次調査の対象に大新部落を選んだ理由は、①酪農がさかんで、酪農生産拡充5カ年計画の進行状況が町平均より少し上回っていること。②町内で一番まとまりのある部落であること。③学校の成績がよい子弟が出ていること。④大新青年学級は町内の14青年学級中運営状況が良好で、道教育委員会指定実験学級となったことがあり、この学級を中心にして、全道青年学級研究集会が開催されていること。（昭和33年。酪農経営を主とした課題解決学習研究）⑤学級生のほとんど全員が「北海道ラジオ農業学校」テキストを所持し、その利用について関心をもっていると考えられたこと。⑥太田正治（八雲農協専務）都築重雄（農業改良普及所長）両氏のような有能な人達の指導が常に得られたことなどである。

(2) 大新部落の概況

大新部落は八雲駅を距ること約10町のところにあり、駅の南西に位し、総面積は約700町歩である（第1図参照のこと）。以下大新1区（開拓地である大新2区、3区

を除く）について概況を説明しよう。

①年齢別・性別人口分布（昭和36年12月末現在。以下の数字も同様である）

表 6 大新部落（1区）の人口

年 令 区 分	総 数	男	女
0 ～ 15才	150	80	70
16 ～ 19	31	15	16
20 ～ 29	55	31	24
30 ～ 39	43	21	22
40 ～ 49	39	15	24
50 ～ 59	35	22	13
60才以上	37	17	20
計	390	201	189

②産業別世帯人口 農業が60戸（農業人口、196人）公務1戸（教員）で、部落全部が農家で占められているといつてよい。なお全戸が自作且つ専業農家である。

③経営面積 つぎの表のとおりで、5～10町歩の農家が多く（73.3%）、田はほとんどなく、大部分が畑である。

表 7 大新1区経営面積

	農家数	田	畑	採放算地	計
2 ～ 5 町	15	町一	54.90	町6.71	町61.61
5 ～ 10 町	44	0.80	270.63	48.23	319.66
10 町以上	1	—	5.15	6.05	11.20
計	60	0.80	330.68	60.99	392.47

表 8 大新1区の主な農作物

作 物	反 別	作 物	反 別
水 稲	8.0	工芸作物	反12.2
麦類	15.5	甜 菜	257.4
大 麦	16.5	デントコーン	529.5
小 麦	301.0	飼 料	1,064.8
蒸 麦	265.5	禾本科牧草	340.0
馬 鈴 薯	10.5	豆 科 牧 草	256.5
豆 類	29.2	作 根 菜 類	3.5
大 豆	4.8	青 刈 飼 料	21.5
小 豆	126.0	其 他 飼 料	21.4
その他豆類	101.0	蘿 菜	
玉 蜀 黍	30.0	合 計	3,314.8
雑 穀			
稗 子			
その他雑穀			

④主な農作物 反別からみると、燕麦・馬鈴薯・甜菜飼料作物が多く（第8表）、その生産量は馬鈴薯が4,633俵、甜菜が454屯320キロである。

⑤家畜 乳牛は6～10頭を所有する農家が、もっとも多い（58.3%）。（第9表）

表 9 大新1区の家畜

種類	乳 牛	馬	細 羊	豚	鶏
頭数	戸	戸	戸	戸	戸
1 頭	1	48	5	—	—
2	2	7	5	4	—
3	—	2	3	4	—
4	3	1	—	5	—
5	4	—	—	6	—
6 ~ 10	35	—	—	8	—
11 ~ 15	14	—	—	3	1
16 ~ 20	1	—	—	2	14
21頭以上	—	—	—	2	35
計	60	58	13	34	50

表 10 大新1区の農業施設

牛 舎	豚 舎	鶏 舎	サイロ	電気牧欄	尿 溜	堆肥盤	納 屋
59	6	13	73	24	55	21	49

⑥農業施設 サイロは全部地上であるが、そのほとんどのものが地下に6尺位入っており、1戸でサイロを2基所有しているものもある。(第10表)

⑦農畜産収入 昭和33年の農家1戸当り実績をみると、約54万円で畜産収入74%、農産収入26%の割合になる。これを、昭和37年には102万円(畜産収入83%、農産収入17%)に上昇させる計画である。牛乳は年間1頭当り平均22石(4,140キログラム。82,000円)、多い方で40石(7,500キログラム)である。4頭(1頭25石)で100石(18,750キログラム)なら良い方とされる。搾乳牛を8頭飼養すればまかなっていけるということである。

表 11 大新1区の農・畜産収入(農家1戸当り)

	33 年 実 績		37 年 計 画	
	生産量	金 額	生産量	金 額
畜 産 収 入				
牛 乳	80石	千円 320	150石	千円 578
個 体	1.8頭	51	2.2頭	100
鶏	20羽	22	60羽	80
豚	0.4頭	5	7.0頭	95
小 計		398		853
農 産 収 入				
馬 鈴 薯	依 91 Kg	千円 69	依 120 Kg	千円 84
甜 菜	13,580	42	22,000	70
そ の 他	—	30	—	13
小 計		141		167
合 計		539		1,020

搾乳牛 6 育成牛 2

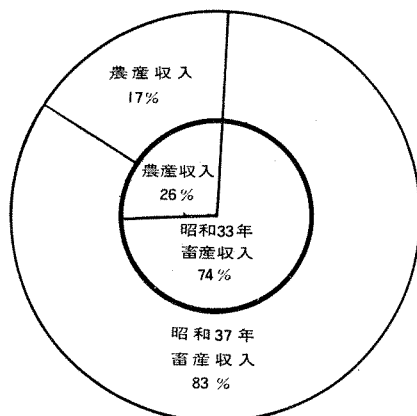


表 12 大新農協経営改善共励会階層表

年 別	A 級 100 万 円 以上	B 級 60 ~ 100 万 円	C 級 30 ~ 60 万 円	D 級 30 万 円 以下	合計戸数
32 年	戸 5 (8.2)	戸 15 (24.6)	戸 26 (42.6)	戸 15 (24.6)	戸 61 (100)
33 年	戸 7 (11.5)	戸 16 (26.2)	戸 24 (39.3)	戸 14 (23.0)	戸 61 (100)
34 年	戸 12 (20.0)	戸 14 (23.5)	戸 28 (46.7)	戸 6 (10.0)	戸 60 (100)
37 年	戸 25 (41.7)	戸 20 (33.3)	戸 15 (25.0)	戸 0 (0)	戸 60 (100)

備考 () 内は農家数比率 %

粗収入をみると昭和34年 A級(100万円以上)が12戸(20%), B級(60~100万円)が14戸(23%), C級(30~60万円)が28戸(47%), D級(30万円以下)が6戸(10%), ABクラス合算して26戸(43%)であったが、これを昭和37年にはA級25戸(42%), B級20戸(33%), C級15戸(25%), D級0戸(0%)つまりAB級を合わせたものを45戸(75%)に高めたと考えている。(第12表参照)

八雲町には年間乳量100石以上の農家で組織する100石会(会員154名)があるが、昭和36年乳量番付表に記載されている農家は当部落に24戸ある。

⑤教育・文化・娯楽・保健施設 大新部落住民が常時利用している施設はつぎの表のごとし。(第13表) 八雲町公民館には15,000冊の図書が備えられ、とくに酪農に関する図書・資料の蒐集に重点を置く。

以上の施設のうち、大新部落に所在するものは大新会館・大新小学校があるのみで、他は全部市街地にでかけて利用している。

④各種団体 第14表のごとし。大新青年団は明治40年1月大新青年会として発足した。日露戦争後郷土を捨て、他に走るものがあり、不合理な経営の結果、疲弊その極に達したが、この窮状を救おうとして数名の若人

教 育 学 部 紀 要 第 9 号

表 13 大新部落住民が利用する教育・文化・娯楽・保健施設

◎印は大新部落内に所在するもの

施 設	名 称	施 設 内 容	備 考
公 民 館	八 雲 町 公 民 館	映写機 2台、幻灯機 3台、テープレコーダー 3台、テレビ 1台、ラジオ 1台、レコードプレーヤー 1台、アンプ 2台	大新部落より4軒
図 書 館	北海道図書館八雲分館 八雲町公民館図書室	道分館所有蔵書数 5,274冊、町図書室蔵書数 10,453冊、紙芝居 50、スライド 75本	公民館内
移 動 図 書 館	大 新 ス テ ー シ ョ ン	巡回々数 6回、1回の冊数 20冊程度 図書は主として小説類	
集 会 所	◎大 新 会 館	40.51坪、2階建、200人収容、木造 集会室 1、2階 1 (16畳) 事務室 控室	事務室に大新農協をおく
小 学 校	◎大 新 小 学 校	学級 2、教員 2名、生徒数 34名	
	八 雲 小 学 校	” 34 ” 40名 ” 1,753名	
中 学 校	八 雲 中 学 校	” 23 ” 36名 ” 1,137名	
高 等 学 校	八 雲 高 校	” 15 ” 39名 ” 703名	
	定 時 制 高 校	” 4 ” 8名 ” 101名	
各 種 学 校	洋 裁	{ 八雲文化服装学院 八雲文化服装学院 八雲家政学院 (農協経営)	
	和 裁	無 認 可 3 校	
	編 物	{ 河野編物手芸学校 他に編物2校	
	自 動 車	八雲自動車学校	
病 院	町立八雲病院国立療養所	練習所 2カ所、大型トラック 3台、普通乗用車 4台、オート3輪 1台 小型4輪トラック 1台、ブルドーザー 1台、スクーター 1台、車庫 2棟	
保 健 所	八 雲 保 健 所		
診 療 所	個 人 病 院 3		
屠 殺 場	八 雲 町 管 屠 畜 場	大正12年設置、1日30頭処理 昭和37年中ユーラップ川畔に漁業公社の屠畜場を作り併設 昭和127年設置	
家 畜 健 康 相 談 所	八雲家畜保健衛生所		
授 精 所	道南家畜人工授精所	昭和127年設置、種牡牛 6頭	
獣 医	27 人		
映 画 館	{ 八 雲 劇 場 中 央 劇 場		
娯 楽 ・ 遊 戯 場	{ バチンコ店 2 スマートボール 1		

表 14 大新部落における各種団体

名 称	対 象	会 員 数			年例会回数	事 業 内 容
		男	女	計		
大 新 青 年 団	青 年 男 女 (15~25才)	19	23	42	12	バザーの開催、共同作業、農事研究、体育、レクリエーション、青年学級の実施
大 新 農 協 婦 人 部	農 家 主 婦	—	58	58	12	小家畜の奨励、料理講習会、敬老会の開催
大新地区酪農青年研究会	青 年 男 子	35	—	35	—	酪農研究
大 新 小 学 校 P T A	児 童 父 兄	—	—	25	12	父兄の親睦、研修、学校施設備品の援助、保健の増進、生活の改善
八 雲 小 学 校 P T A	”	—	—	22	12	
八 雲 中 学 校 P T A	生 徒 父 兄	—	—	20	12	
八 雲 高 校 P T A	”	—	—	9	4	
農 事 研 究 会	一 般 男 子	20	—	20	4	農事研究

が決起したのがその端緒であるという。その後夜学会を経て青年団へと発展をみるに至った。

⑩マス・コミュニケーション

イ。部落内のラジオ受信機台数は53台、テレビ受像機台数は17台である。(部落戸数61戸)

ロ。新聞購読世帯数は52戸で、その内訳は、「北海道新

聞」45、「北海タイムス」2、「朝日新聞」2、他3(「八雲新報」「道南民報」)である。

購読雑誌は「家の光」38戸、「農家の友」13戸等が多い。

ハ。広報活動有線放送は調査当時計画中であり(昭和37年4月1日開設。事業主体農協)、広報紙もない。

掲示板が部落の入口に一つあり、ポスター等を掲示する。行事がある場合には回覧板が使用され、その他嘱託員より各班長を通じて各戸に周知伝達をはかる。

①部落の指導者 農事指導においては、太田正治・都築重雄両氏の功績が大きいように思われる。太田氏は大新部落に住み、北日本酪農青年研究連盟（会員7,000名）の委員長、八雲町農協専務理事等をつとめ、昭和27年デンマーク農村に視察と実習にでかけ、デンマーク農業に関する著作も多い。また都築氏は町の農業改良普及所長として、豊富な経験をもとにして着実に農事の指導を行ってきた。この2人について、つぎのような評がある。

「普及所は農協の中にある。太田専務と都築所長は席を連ねているし、幼い時からの友人でもある。太田さんはいまでも人生に夢を忘れない理想家肌、都築さんは地道にコツコツと積み上げて行く堅実派。だからこの2人のコンビはまことにうまくいっている。八雲町は人をえたといわなければなるまい。」（吉田十四雄「酪農と八雲」農業北海道 昭和35年7月号）

5. 大新青年学級の実態

(1) 発展の経過

昭和36年度現在八雲町には14の青年学級がある（昭和27、28年度は18）が、町の計画書によると大新青年学級は開設期間は通年制、日数は年間60日、時間数130時間、受講者数37名となっており、町内の青年学級中では良好な運営状況を示している。従って町の予算配分額も21,000円と最高を示す。（第15表）

大新青年学級は昭和26年町教育委員会の学級開設呼びかけに対し、部落青年の実際生活に必要な知識と一般教養の向上を目的として自主的に結成発足したといわれる。昭和33年度に至り北海道教育委員会より実験青年学級としての指定を受けるに至った。

(2) 学級の目標

酪農地帯の青年学級における共同学習をどのように進めるかが研究主題であり、町酪農生産拡充5カ年計画にもとづき、大新部落の目標計画と学級との関連を保ち、地域の特性を生かし、学級に当面する課題の解決につとめる点にあると指摘される。

(3) 学級の機構・運営（第2図参照）

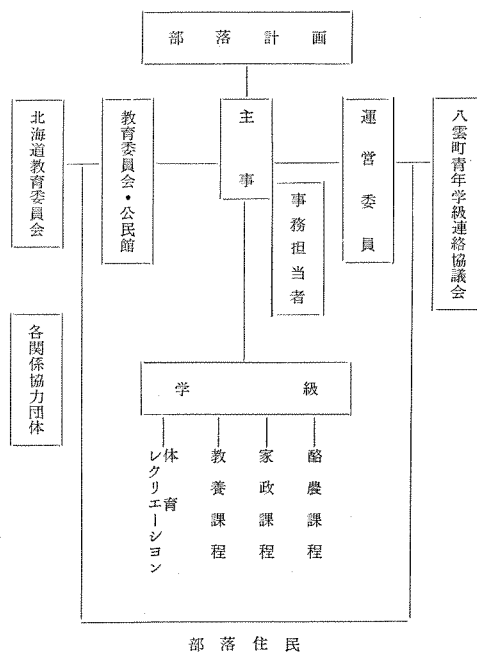
①学級主事を大新青年団長とし、学級生の中から事務担当者を選出する。

表 15 八雲町の青年学級（昭和36年度）

項目 学級	期 間 (月)	日 数 (日)	時間数 (時間)	受講者数 (人)	予算配分額 (円)
黒岩青年学級	4	36	105	40	19,142
漁協 "	4	27	81	35	11,112
春日 "	12	32	120	30	16,876
大関 "	12	40	120	25	14,526
富咲 "	11	20	80	15	13,028
鉾山 "	10	40	120	25	16,300
◎大新 "	12	60	130	37	21,786
熱田 "	12	31	100	20	15,186
浜松 "	12	40	120	27	19,286
山越 "	5	60	80	15	12,820
野田生 "	12	71	192	50	16,376
野田迫 "	12	40	80	30	14,176
上の湯 "	12	30	90	30	12,226
茂無部 "	4	18	50	25	8,712
合 計			1,468	1,140	211,552

- ② 運営委員は学級生並びに部落関係者より選任する。
③ 教育委員会並びに公民館職員は、学級主事及び事務担当者の職務に協力援助する。

図 2 大新青年学級の機構・運営図



北海道教育委員会「北海道実験青年学級実施報告書」
（昭和33、34年度）より引用

(4) 開設場所

大新会館で行なわれる。部落には小学校もあるが、か

教 育 学 部 紀 要 第 9 号

たよった位置にあるので、大新会館が部落のセンターとして公民館的存在となっており、青年学級は主に会館で開催される。

(5) 年間の学習日数・時間数・在籍者数

第 16 表のごとし。近年、開講日数は約 50 日、学習時間は 100 時間を上回り、在籍者は 30 人台である。

(6) 学 級 生

昭和 36 年度学級生 33 名の職業をみると、公務員 2 名（男子）を除き、他は全部農業に従事している。

なお青年学級対象者調べによると、昭和 8 年 4 月 2 日以降昭和 18 年 4 月 1 日の間に出生したものは、世帯数で 48 戸、人員では男 50 人、女 49 人、計 99 人であるが青年学級生を出している家と該当者のいる家は 38 戸であるという。

(7) 学習内容と講師

昭和 36 年度の時間表と講師の職・氏名を記せば、第

表 16 大新青年学級の学習日数・時間数・在籍者数

種 別 年 度	開講 日数	総時間数	在 籍 数			出席率	備 考
			男	女	計		
昭和26年度	26	77	20	23	43	78	自 11 月 月 至 3 月 月 至 4 月 月 至 3 月 月
" 27	41	90	14	24	38	72	"
" 28	35	114	13	19	32	74	"
" 29	33	121	13	25	38	71	"
" 30	36	100	17	23	40	51	"
" 31	43	108	16	19	35	62	"
" 32	49	135	16	18	34	71	"
" 33	56	122	18	17	35	79	"
" 34	51	113	18	17	35	—	"
" 35	50	100	18	13	31	—	"
" 36	50	100	18	15	33	—	"

17 表のごとし。

学級は通年制で毎週火曜日の夜実施する。学年制・コース制はとっていない。学習課程は酪農・家政・教養・体育レクリエーションの各課程に分れる。

昭和 36 年度の時間表をみると前期（4～9 月）・後期

表 17 大新青年学級の学習内容と講師（昭和 36 年度）

(1) 前 期

月 日	教 科	学 習 内 容	講 師 の 職 業	講 師 氏 名	備 考
4/11		開 講 式	学 級 主 事	太 田 正 治	
4/18	職 業	農 業	農業改良普及所長	都 築 重 雄	
4/25	"	農 業 気 象	立岩部落・農業	加 藤 孝 光	
5/ 2	一 般 教 養	ものの見方と考え方	大新小 学 校 長	神 田 勇	
5/ 9	家 事	料 理	学 級 生	坂 本 洋 子	
5/16	一 般 教 養	青年の歴史と文脈	学 級 生 先 輩	茂 木 英 一	
5/23	体 育 レ ク リ ン	サイクリング	学 級 生	坂 本 洋 子	
5/30	職 業	農機具の正しい使い方	大新農業・篤農家	太 田 保	
6/ 6	体 育 レ ク リ ン	社 交 ダ ン ス	学 級 生	坂 本 重 幸	
6/13	家 事	衣 服 と 個 性	農業改良普及所技師	庄 野	
6/20	体 育 レ ク リ ン	映 画 鑑 賞	学 級 生	長 谷 川 義 敬	
7/ 4	"	遠 足	学級生先輩・篤農家	井 上 英 夫	
7/11	一 般 教 養	男の立場と女の立場	町教委教育課長	大 島 日 出 生	
7/18	"	天 文 学	八雲中学校教諭	近 藤 正	
7/25	職 業	農 業 時 事	学 級 主 事	太 田 正 治	
8/ 1	体 育 レ ク リ ン	映 画 鑑 賞	学 級 生	長 谷 川 義 敬	
8/ 8	家 事	料 理	幼稚園 教 諭	太 田 ふ じ	
8/15	体 育 レ ク リ ン	レクリエーション	学 級 先 輩	坂 本 重 幸	
8/22	職 業	視 察	"	長 谷 川 義 敬	
8/29	一 般 教 養	座談会・恋愛について	学 級 生 先 輩	茂 木 英 一	
9/ 5	職 業	飼 育 管 理	雪印乳業技師	内 藤 貢	
9/12	一 般 教 養	交 換 会			交友・意見の交換
9/19	"	社 会 と 宗 教	幼稚園長・(元町長)	真 野 万 穂	
9/29	"	反 省 会	学 級 生	長 谷 川 義 敬	

北海道の産業振興とマス・コミュニケーション

(2) 後 期

月 日	教 科	学 習 内 容	講 師 の 職 業	講 師 氏 名	備 考
10/ 3	職 業	飼 育 管 理	雪 印 乳 業 技 師	内 藤 貢	
10/10	一 般 教 養	時事問題 不景気について	大 新 小 学 校 長	神 田 勇	
10/17	体 育 レ ク リ ン エ ー シ ョ ン	映 画 鑑 賞	学 級 生	長 谷 川 義 敬	
10/24	一 般 教 養	ペ ン 習 字	学 級 生 先 輩	茂 木 英 一	
10/31	体 育 レ ク リ ン エ ー シ ョ ン	音 楽	学 級 生	太 田 真 樹 夫	
11/ 7	家 事	礼 儀 作 法	編 物 学 校 経 営	河 野	
11/14	体 育 レ ク リ ン エ ー シ ョ ン	映 画 鑑 賞	学 級 生	太 田 真 樹 夫	
11/21	家 事	食生活について	農 業 改 良 普 及 所	今 泉 弥 生	
11/28	一 般 教 養	座 談 会	学 級 生	細 川 昌 隆	
12/ 5	"	交 換 会	"	長 谷 川 義 敬	友交・意見の交換
12/12	家 事	年末特別作業	"	井 上 美 智 子	牧舎のかべはり
12/19	一 般 教 養	東八雲青年団体協議会反省会	"	太 田 真 樹 夫	
12/26	体 育 レ ク リ ン エ ー シ ョ ン	ク リ ス マ ス	"	長 谷 川 義 敬	
1/ 2	"	新 年 会	"	"	
1/ 9	職 業	冬 季 学 校	"	太 田 真 樹 夫	9. 10. 11日3日間町役場で開催
(酪農青年研究会主催 町、農協、教委、雪印後援 経営・農政・家畜飼料について)					
1/16	体 育 レ ク リ ン エ ー シ ョ ン	青年団、新年総会	学 級 生	太 田 真 樹 夫	
1/23	一 般 教 養	東青協新年総会	"	"	
2/ 6	職 業	経 営 計 画	"	坂 本 重 幸	
2/13	"	"	"	"	
2/20	体 育 レ ク リ ン エ ー シ ョ ン	映 画 鑑 賞	"	長 谷 川 義 敬	
2/27	家 事	料 理	"	井 上 美 智 子	
3/ 6	体 育 レ ク リ ン エ ー シ ョ ン	ひ な 祭	"	坂 本 洋 子	
3/13	"	雪 祭	"	長 谷 川 義 敬	
3/20	"	敬 老 会	"	細 川 昌 隆	
3/27	一 般 教 養	反 省 会	"	長 谷 川 義 敬	

(10～3月)に分れ計50日である。学習内容は前年度とはほとんど変わったところがない。

講師の顔ぶれは部落内外にわたっており、部落外から27人、部落内が23人である。講師は町教育委員会・小中学校教員・幼稚園長・各種学校教師・農業改良普及員・雪印乳業技師・篤農家・学級生先輩等多彩であるが、学級生自身が指導者となっている場合が多いことが目につく。この現象は後期とくに12月以降に多いようである。

(8) 学習上の特色

大新青年学級では町の酪農生産拡充5カ年計画を理解しようと努め、自家の酪農経営に直結した学習を主として学ぼうとしている。

だから、その内容は地域の実態に即した酪農に関する事項が中心になる。

学習形態は当初ほとんど講演式で、受動的であったが次第に質疑応答が多くなり、次いで座談会形式が喜ばれるようになり、さらに実習・見学・視察・視聴覚の方法

研究発表等に展開してきたという。

36年度の実状をみると、映画は4回利用しているが、スライドは使用していない。ラジオは約5回利用しているが、ラジオ自体をきくのではなくレコード利用のためであるという。騰写版は毎月2週間位使用し、連絡用・歌詞の印刷等に用いている。図書は約30冊(酪農・小説)あるだけで、他にみるべき設備はない。

見学は青年団の行事として3回実施しており、倶知安の馬鈴薯栽培・養豚、伊達のビート工場見学等である。

(9) 出席状況

毎月の平均出席者数は多い月で26名(5月)、少ない月は16名(11月)である。

(10) 予算

昭和36年度の子算をみると、歳入は21,786円(全額町費)で、歳出は給与報酬が14,110円(64.8%)、その他が7,676円(35.2%)である。「その他」の内訳は燃

料費・消耗品費である。

6. 大新青年学級生の活動状況

今回の調査対象となった大新青年学級生 28 名（調査当時不在の者を除く全員）を年齢・学歴・職業別に考察すれば、第 18 表のごとくなる。

①性別では男女各 14 名ずつである。

②年齢別では 20 歳未満が 8 名（28.6%）、20 歳以上が 20 名（71.4%）で、18 歳未満の者は 1 名もいない。平均年齢は 20.5 歳である。

③学歴別では、中卒が 23 名（82.1%）、高卒が 5 名（17.9%）で、高卒者のうち女子は 1 名である。

④職業別では、ほとんどが農業に従事しており、公務（町役場勤務）が 1 名いるのみである。

表 18 年齢・学歴・職業からみた大新青年学級生
a) 年 令 別

	男	女	計
18 ～ 19 才	4	4	8
20 才 ～	10	10	20
計	14	14	28

b) 学 歴 別

	男	女	計
中 卒	10	13	23
高 卒	4	1	5
計	14	14	28

c) 職 業 別

	男	女	計
農 業	13	14	27
公 務	1	0	1
計	14	14	28

つぎに、昭和 36 年度における学級生の活動状況を考察しよう。

(1) 施 設 の 利 用

公民館を利用した学級生は約半数の 15 名で、他の者は全然利用していない。公民館で青年団活動を行なうというものが用途の大部分を占めている。

小学校は大部分の学級生が使用しているが、中学校・高校は関係が薄い。

各種学校は冬期 12 月から 3 月にかけて、女子のほとんど全員が利用する。洋裁・編物学校が多い。（注）

農協の利用状況をみると、男子は全員、女子は 14 名

中 12 名が利用している。主として飼料・家庭用品の購入のために農協へ出かけているが、農業改良普及所は 7 名（男 6，女 1）が訪れたにすぎない。訪問の内容としては、農業一般、畑の生産、作物の病虫害、牛の飼育、乳量についての相談等が主な事項である。

(2) 集会等の諸活動

①講座 5 名（17.9%）が諸講座に参加している。その講座は、「冬季学校」（酪農青年研究会主催）「作物病虫害予防講習会」（農協主催）、「衣食住・生理衛生講習会」、「看護法講習」（日赤主催）等で主として公民館で開催されたものである。その他、茶道・華道・料理等の講習が女子に利用されている。

②年中行事 運動会とくに小学校の運動会に学級生はよく参加し、その行動半径は大新・浜松・春日・八雲の各小学校におよんでいる。祭礼も楽しみの一つとされている模様であり、八雲・春日・立岩各神社の祭礼に出かけている。サイクリングも若い人達の楽しみのようである。共進会参加を挙げたものは 3 名で、部落・町・道南全道の各共進会がある。

③視察 男子 3 名、女子 3 名、計 6 名が挙げている。視察内容は酪農研究が多く、日高（静内・新冠・豊里）、遠浅・江別の牧場視察、立岩農家（八雲町）での飼育管理見学、羊蹄山麓での視察、即ち喜茂別のクレードル、玉蜀黍・アスパラガス罐詰工場、澱粉工場、俱知安農協の豚飼育、留寿都の酪農共同化、伊達のビート工場等である。女子では料理の勉強のため、冬季 2 週間にわたり、野幌の三愛塾を受講したものがある。

(3) 団体・研究グループ

青年団には全員が参加しており、25 歳になると自動的に退団するということである。青年団行事の主要なものは試作畑共同作業、農産物品評会、マキ切り、パザー、敬老会、座談会の開催等である。特色ある組織としては酪農青年研究会がある。そのウインター・スクール（冬季学校）は全道的にも著名であり、地味ながら底力のある組織といわれている。学級生中男子 3 名が参加している。このほかにカール同志会がある。これは乳牛の改良と実習におもむいた人達の横のつながりをもつための歓迎壮行会であるという。最近青年達はカール制度にあこがれてきているという。

一方、女子のための団体・研究グループはとくに見出すことができない。

（注） 今次調査においても女子は各種学校通学者が多く 14 名中 13 名が通学している。その内訳は洋裁 7 名、編物 4 名、和裁 2 名である。洋裁 7 名のうち 6 名までが家政学院に通っている。家政学院は昭和 25 年農協

の指導事業の一環である生活改善事業及び教育情報事業として農協に設けられたもので、毎回30乃至40名の農家婦女子が洋裁・料理・作法等を学ぶものである。

7. 大新青年学級に対する学級生の意向

大新青年学級の運営に対する学級生の意向をみてみよう。

(1) 青年学級へ通うようになった動機 積極的な意欲はみられない。「友人に誘われた」「皆がいくから」「自然に入った」等の受動的な回答が19名(67.9%)を占める。何かを勉強しようとして通うようになったものはわずか4名である。これらの傾向は男女に共通に現われている。

(2) 興味のある科目と内容 興味ある科目としては「農業・酪農」(9)があるが、これは大部分、男子が挙げたもので、女子では「料理」(4)が目立つ。そのほかでは、「音楽」(5)、「レクリエーション」(4)等趣味的なものが好評である。科目と対応して興味ある内容は、「飼料給与方法」(2)「飼育管理」「営農の自由化と農業」(各1)があるが、人気があるのは趣味的なもので、「合唱」(5)、「フォーク・ダンス」(3)等である。女子では「ビールのつまみの作り方」「西瓜を利用した料理」が挙げられているのが面白い。

(3) 仕事の上に役立った事柄 男子の場合、「乳牛飼育管理」(6)「飼料計算」(2)が挙げられた。女子では際立ったものがなく、「料理」「蔬菜(パセリ・白菜)の移植」「手芸(人形づくり)」等である。

(4) 今後学級としてやってもらいたいこと とくに顕著な要望はみられない。「今迄どおりでよい」(4)「人を沢山集めて自分の気持ちを伝えるだけでもよい」(1)とするものがある。一応要望を挙げると、農業・酪農・乳牛の飼育管理・飼料計算・時事問題・料理・栄養(カロリー計算)・花・茶・レクリエーション・グンス等が目新しいものはない。

(5) 学級にほしい設備 28名中21名(75%)がなんらかの設備を挙げている。第19表に示すとおりであるが、とくに楽器に対する要望がつよいようである。指導主事が来て、「オルガンを買ってやる」といった言葉を

表 19 将来学級にほしい設備

設 備	人 数
楽 器	6
レコード・プレーヤー	4
電 蓄	4
レクリエーションの道具	4
オ ル ガ ン	3
料 理 の 設 備	3
机 ・ 椅 子	3
照 明	2
テ レ ビ	2

おぼえていて、オルガンが入るのを心待ちにしているものもある。さきに記した「音楽」「レクリエーション」への期待が「楽器がほしい」という声になって現われたものであろう。一方、机・椅子・照明等が挙げられていることは、現在の青年学級の学習環境の不備を物語る。これはひとり大新青年学級だけのことでなく、大部分の青年学級に共通する問題でもあろう。

(6) 希望する学習方法 「従来どおりでよい」とするものが最も多い。(10名) とくに希望する学習方法はないようで、「スライド・映画等の使用」(4)「実験的方法」「実習的なもの」(各2)があるくらいで、現在の学習方法に大体満足している模様である。

(7) 講師への要望 このことは講師に対する要望にもいえることで、15名(53.6%)が「要望なし」と答えている。しかし、回答を一応紹介するならば、つぎのごときものがある。

- ・話の上手な人が望ましい。
- ・余りむずかしいことをいわないでほしい。
- ・新しい講師を世話してほしい。
- ・興味深くやってほしい。
- ・酪農ばかりでなく、女子向きの話(料理・婦人問題等)をやってほしい。
- ・時間を守ってほしい。

8. 酪農生産拡充5カ年計画に対する学級生の関心

酪農生産拡充5カ年計画の理解と実践への協力は、大新青年学級の課題であったはずであるが、学級生はこの計画にどれだけの関心を示しているであろうか。

八雲町農協の資料によると、「酪農生産拡充5カ年計画」は、さきに述べたように、組合員の生産増強と経営の安定をはかるための計画であり、その方法は、土地改良を行ない、牧草地をはじめ、粗放な飼料畑を更新改善し、良質の飼料を増産して、中小家畜を含めた酪農生産の飛躍的増加をはかると共に販売作物は総面積の2割にとどめ、しかもその内容を検討、雑多な作物を作ることをやめて、町で最も安定適作である馬鈴薯と甜菜に集約、農業の構造を簡単にするることによって、労力を省きながらしかも輪作によって耕地全体を高度に活用、確実な計画生産をはかろうとするもので、そ

表 20 八雲町酪農生産拡充5カ年計画年次目標(販売金額)(単位:100万円)

32 年	253
(1) 33 年	270
(2) 34 年	300
(3) 35 年	360
(4) 36 年	420
(5) 37 年	480

表 21 酪農生産拡充5カ年計画
—過去4カ年の実績と最終年度の計画—

	32 年 実 績	実 績				37年（第5年次）目標	
		33年（第1年次）	34年（第2年次）	35年（第3年次）	36年（第4年次）	生 産	販 売 金 額
牛 乳	34,000石	38,000石	42,000石	46,000石	(50,000)石	52,000石	24,960万円
馬 鈴 薯	73,000俵	66,087俵	種 62,311俵 食 8,196 万斤	96,705俵 19,317 万斤	55,016俵 4,937 万斤	70,000俵 10,000 万斤	5,250 600
甜 菜	568	763	1,060	1,170	596	1,000	3,150
米	—	1,475俵	1,700俵	3,500俵	4,787俵	5,000俵	2,000
乳 牛	472頭	291頭	416頭	536頭	(630)頭	700頭	7,700
老 麩 牛	9頭	4頭	27頭	56頭	(60)頭	100頭	700
肉 豚	—	—	100頭 万円	235頭 万円	(1,000)頭 万円	2,500頭	37,000
計	25,000	27,000	30,000	38,054	(41,818)	—	48,060
32 年を 100とした 増 産 指 数	100	108	120	152	167	—	192

備 考 () 内は未定

の年次目標（販売金額）、過去4カ年の実績と最終年度（37年）の計画はつぎのとおりである。（第20・第21表）

この計画と成績について農協の資料をみると、32年即ち5カ年計画着手以前の農業生産にくらべて総体においては大体順調に生産を増加したという。但し35年度の馬鈴薯の大豊作は計画を3,000万円上回る結果となったのに対して、36年度は逆に馬鈴薯・甜菜の大不作の影響を受け計画を約4,000万円下回る数字を示している等、主として耕種関係において、ジグザグがあったにもかかわらず、全体を総合すれば大体目標に対して忠実な実績をあげることができたという。そして、これら販売作物の豊凶をカバーしたのは、畜産部門の伸長であり、牛乳をはじめ、乳牛個体及び豚の生産が計画通り着実に増加している。若しも、八雲の農業形態が、馬鈴薯・甜菜・雑穀等に重点を置きたいわゆる従来の主穀農業を続けていたとするならば、36年度のごときは恐らく致命的打撃を受けたであろうし、「5カ年計画」が天候その他自然条件の変化に耐えて、初期の目標に向かって着実に増産していることは、主として経営の将来に対する確固たる目標を与えられたことによる、生産意欲高揚の結果であろうと述べている。

ところで、大新青年学級生の本計画に対する評価と関心はどうであろうか。

「酪農生産拡充5ヶ年計画」があることを知っている学級生は23名（男13名、女10名）で、総数の82.1％に相当する。つぎに「この計画のできた年」について、昭和32年と正確に答えたものは7名（男4名、女3名）であって、総数の25％にすぎない。（33年＜第1年次＞と答えたもの1名を含む）他の回答は年次が不正確（8名、28.6％）であるか、「わからない」（13名、46.4％）によって占められている。

さらに、本計画が「うまく進んだと思うか」については、「うまく進んだ」が11名（男6、女5）で39.3％、「うまく進んでいない」が8名（男6、女2）で28.6％と2つの意見に分れる。「わからない」は9名（32.1％）である。

「うまく進んだ」と答えたものは、よい点としてつぎの諸点を挙げている。

①計画によって生産をあげねばならぬと感ずる。②1戸1戸の標準が決めてある。③計画的な畑の改良などに役立つ。④水道をつけるし牛舎も新築する。⑤農協の豚舎が36年暮にできたし、牛の飼育も農協で考えて進めている模様だ。

一方、「うまく進んでいない」と答えたものが挙げた理由は、①計画どおり行かない、②実際の役に立たない、③収入の面等であり、その理由は具体性に乏しく、「わからない」「なんとなく」「そういわれても困る」等、あいまいな答が目についた。そのほか、本計画について、「農協の〇専務が熱心にやっており、豚や鶏が入った人もでてきたが、売る時に価格変動があり、赤字になり困っている人がある。この尻ぬぐいをしてほしい」（23歳、男）という意見もあった。

つぎに、酪農生産拡充5カ年計画によると、八雲町農家の年間粗収入はどの位なければならぬかきいてみた。100万円という回答を予想したが結果は第22表のごとくである。

これをみると、100万円としたものは、わずか5名（17.9％）で、60万円台としたものも誤ま

表 22 八雲町農家の望ましい年間粗収入

年間粗収入	回答者数
万円	人
60	1
65	1
60～80	1
80	1
100	5
150	2
わからない	17
計	28

りではないが、「わからない」が実に17名(60.7%)もいることは、学級生が本計画のポイントを抑えていないと考えられても致し方がないであろう。

八雲町ではこの5カ年計画の外に、毎年「営農設計の手引き」を出している。これは相当高度の手引き書で、理解するにはなかなか骨が折れるように思われる。これを基礎に各戸がたてる「営農計画書」も完全に書きこなすのは容易なことではない。然し都築農業改良普及所長の談話によると、とにかく農家が記入する気持になって努力するようになってきたということである。

「営農設計の手引き」と「営農計画書」に対する学級生の関心を調べてみよう。

「営農設計の手引き」を読んだことがある学級生は、12名(男10、女2)読んだことがないものが16名(男4、女12)で、読んだことがあるものは半数に達しないし、さらに女子はほとんどが読んでいない。

これを読んだ理由としては、①営農計画をたてる上にぜひ必要、②営農計画書記入のため、③飼料・肥料について知りたい等が主要な事項である。

読まない理由は、男子の場合、「父に一任している」「みたくないから」「わからない」等であるが、女子では「余り興味がない」「仕事が忙しい」「むずかしい」「関係ない」等軽くあしらわれた感じがする。

ところで、「営農設計の手引き」を読んだものに対して理解できたかどうか調べると、結果は「理解できた」(8)、「理解できない」(4)である。理解できたとするものはほとんどが男子である。(女子1名)「理解できない」ものが挙げた理由は、「書いてあることがピンとこない」「むずかしすぎる」「やる興味がないから」等読まぬ理由と共通している。

つぎに「営農計画書」に目を通したことがあるか調べてみると、「目を通したことがある」が20名(男10、女10)「目を通したことがない」が8名で、7割の学級生は一応計画書に目を通しており、男女ともよく見ているといえよう。「営農計画書」の方が「手引き」より、青年達にとって、ファミリアで切実な感じがするのである。

この「計画書」を作る際相談を受けたものは、11名(男9、女2)で、女子はほとんど相談を受けていない。相談を受けた事柄としては、①とくに牛について、②飼料について、③畑は父がやるが乳牛は自分がやり、飼料の購入もやる、④父が書かないので、家族が皆で話し合い、その結果をまとめて自分が記入する。時間がかかるので苦労はするがためになる等があった。

計画書に目を通してはいるが作成について相談を受け

なかったものは9名(男1、女8)で、その理由は「父に任せてある」(男子)「兄達を作る」「自分が関心を持たぬから」「意見を述べたこともない」(以上女子)等である。女子の中には、搾乳・牛の世話・畑の作業をやり計画書にも目を通すが、なんの相談も受けていないというものもあった。

八雲町では営農改善推進機構を設け、各地区毎に営農の目標を定めるということであり、また第2次酪農生産拡充5カ年計画(昭和38—昭和42)の構想もあるときくが、このような計画が農民の一人一人に理解され、その協力が得られるように、啓蒙普及が行われ、またとくに青年学級の学習に考慮が払われなければならない。そして、営農に関する諸資料を十分消化しうるだけの力を養うようにしなければならないと考える。

9. マス・メディアとの接触状況

本題である学級生とマス・コミュニケーション・メディアとの接触状況を考察しようとするのであるが、まずメディア別に新聞・雑誌・週刊誌・図書・映画・ラジオ・テレビの場合をみると、ついで学級生が、これらのマス・メディアから農業とくに酪農に関する情報・知識をいかに受けとっているか調べてみることにしたい。

(1) 新聞

学級生の家庭中新聞を購読している家庭が19戸(79.2%)、購読していないものが5戸である。

「北海道新聞」(17戸)が最も多く、他には「朝日新聞」(2戸)「道南新報」(2戸)がある。2種購読しているものは2戸である。

新聞は大部分の農家に入っているが、学級生はこれをもどのように読んでいるであろうか。学級生が読まない欄として挙げているものは、「国際政治」・「経済」が一番多く、以下「学習」・「学芸」・「国内政治」とつづき、この傾向は男女ともに現われている。青年学級生が政治・経済欄を読まないことは、大新青年学級のみの現象ではなく、伊達町東紋鑑青年学級・倶知安町瑞穂農業青年学級・栗山町青年学級・伊達町有珠漁業青年学級等で行なわれた道教委の青年調査でも同様な結果を示している。

一方よく読まれている欄では、「ラジオ・テレビ番組」が最高位を占め、これについてよく読まれるのは「写真」・「漫画」・「スポーツ」・「地方版」である。軽い内容の記事や、自分達に身近な出来事に、もっとも興味が引かれるようである。なお、男子(2名)は自分の家で新聞

を購読しなくても、どこかで都合して読んでいるが、女子（3名）は、自分の家に新聞がない場合、全然読もうとしていない。

表 23 学級生が読まない欄（新聞）

	国際政治	国内政治	経 済	社 説	社 会 (三面記事)
男	10	9	10	6	6
女	9	8	9	7	3
計	19	17	19	13	9
	小 説	漫 画	ゴシップ	映画・演劇評	地方版
男	8	4	8	6	2
女	3	1	3	3	3
計	11	5	11	9	5
	家 庭	スポーツ	学 芸	ラジオ・テレビ番組	天気予報
男	6	1	10	0	1
女	6	4	7	0	5
計	12	5	17	0	6
	写 真	本・雑誌の広告	その他広告	学 習	投 書
男	3	4	6	10	7
女	0	3	3	8	7
計	3	7	9	18	14

(2) 雑 誌

学級生の家庭では11戸（45.8%）が購読しており、その中「家の光」は9戸におよぶ。なお1戸で2種購読しているものが2戸、3種が1戸ある。「家の光」以外の雑誌名は、「リーダーズ・ダイジェスト」「明星」「農家の友」「デーリイマン」等である。

さて、学級生が毎号きまってよく読む雑誌（農業雑誌を除く）であるが、「きまって読む雑誌がある」というものは半数の14名（男5、女9）で、女子の方がよく読む模様である。雑誌の種類は、やはり「家の光」が断然多い。（13名）男子は全部「家の光」を挙げているが、女子は「明星」（2）「平凡」（1）等も挙げている。雑誌をよく読むものは、ほとんどが買って読み、借りて読むものは女子に1名あるだけである。（「平凡」）

(3) 週 刊 誌

目を通してしている週刊誌があるものは8名（男女各4名）、ないものは20名（男女各10名）で、週刊誌は月刊雑誌よりは、読まれていない。そして買って読むものと借りて読むものが、半数ずつになっている。

誌名は「週刊明星」（4）、「週刊女性」（2）、「週刊新潮」（1）等で、興味ある記事としては、小説（5）、映

画の紹介（2）、現代の人達の行動、社会問題、時事（各1）等が挙げられている。

(4) 図 書

八雲町公民館の資料「図書利用状況調べ」によると昭和34年、移動図書館大新ステーションに貸し出された図書の冊数は131冊であり、利用冊数は173冊、利用率は132%で、八雲町の12ステーション中第8位を示し、決して成績のよい方ではない。職業別にみると、農業が113人（男86、女27）で総利用者数の65%に相当する。年令別では15～20才が65人（男20、女45）、21～25才が91人（男63、女28）で、利用者はほとんどが青少年層である。

ところで大新青年学級生で昭和36年中に移動図書館を利用したのは男子1名（短篇小説、囲碁の本）、女子2名（青年向きの本等）を見出すにすぎない。さらに公民館での図書の借り出しも3名を数えるにすぎない。

買って読む本はどうであろうか。36年1年間に買った本があるものは、わずか4名（男女各2名）である。本の名前は、男子の場合、呉清源「囲碁の研究」「伊藤整全集」「自動車運転問題集」であり、女子では「編物」と、人形の作り方を記した「ぬいぐるみ人形」である。女子の中には中学校を卒業してから本を借りたことも読んだこともないというものささえあつた。

買ったと借りたとの別なく、この1年間に読んだ本の中で一番感激したり、よいと思った本を挙げさせたが、そのような本があるというものは男子1名で、小説（題不詳）を挙げている。

以上の新聞・雑誌・週刊誌・図書等に用いる読書時間は第24表のとおりであるが、読書時間がないものが12名（42.9%）もいる。1時間と答えたものが6名いるが果してそれだけ読んでいるか疑問である。

表 24 学級生1日の読書時間

	な し	10 分	20 分	30 分	30分～ 1時間
男	7	0	1	1	0
女	5	1	0	2	2
計	12	1	1	3	2
	1 時 間	1時間半	50 分 2 時 間	2 時 間	
男	4	0	0	1	
女	2	1	1	0	
計	6	1	1	1	

読書時間は夜間に集中し、午後7時から午後9時半頃におよんでおり、午後8時代がピークである。読書の場所は茶の間（10名）が多いが、床の中（3名）、台所（1

名) というものもある。

(5) 映 画

八雲町には市街地に映画館が2館あるが、学級生の中1年間に映画を全然みなかったものは6名。他は一応みているが、平均月1回以下が多く、映画の好みは邦画の現代物とくにアクション物が人気を占める。(第25表)

表 25 学級生が映画に行く回数

	男	女	計
年2回(月2回)	3	0	3
年12回(月1回)以上	1	2	3
年6回以上	5	2	7
年5回以下	1	8	9
行かない	4	2	6
計	14	14	28

(6) ラ ジ オ

学級生の家庭24戸中22戸(91.7%)にラジオがあり3台所有する農家も1戸ある。ラジオは茶の間に置かれている場合が大部分であるが、牛舎・台所というものが夫々1つずつある。

つぎに学級生が日常よくきくラジオ番組を調べてみよう。(第26表)

表 26 学級生がよくきくラジオ番組

順位	番組名	男	女	計
①	歌謡曲	13	12	25
②	天気予報	11	12	23
③	ニュース	9	11	20
④	スポーツ	12	7	19
⑤	放送劇	7	8	15
⑥	農事	5	6	11
⑦	演芸	6	5	11
⑧	演浪曲	5	4	9
⑨	時事解説	3	5	8
⑩	軽音楽	4	4	8
⑪	クイズ	2	5	7
⑫	社会	2	4	6
⑬	青年	0	6	6
⑭	教養	2	2	4
⑮	婦人	0	3	3
⑯	幼児・児童	1	2	3
⑰	舞台中継	0	2	2
⑱	邦楽	1	0	1
⑲	洋楽	0	1	1
⑳	語学講座	0	0	0

よくきくラジオ番組のベスト・ファイブは歌謡曲・天気予報・ニュース・スポーツ・放送劇で、「娯楽」と「生活に実益ある」番組が歓迎され、農事番組がこれにつづく。青年向き番組は女子だけがきいており、男子は1人も挙げていない。ラジオをじっくりきくということは恐らく行われていないのであろう。

なお「家庭にラジオはあるが、テレビを視聴するのでラジオ番組はどれも余りきかない」、「ラジオはHBCがよく入るので、主にHBCをきく」というものが各1名あった。

(7) テ レ ビ

学級生中テレビのある家はわずか4戸(16.7%)であるが、自宅以外でもテレビは視聴されている模様である。テレビが無く、外でも全くみないものは11名である。

よくみるテレビ番組は、ジャズ・ミュージカル・歌謡曲が第1位であるが、中でも歌謡曲が強い人気を占めることはラジオと同様である。これにつづいて、メロドラマ・ホームドラマ(日本)、ニュース・ニュース解説・時代活劇・西部劇・スポーツ等が並ぶ。その愛好される度合いは男女の性別を問わないといってよく、女子もスポーツ番組ではプロレスに一喜一憂し、相撲や野球を楽しんでいるのである。社会・教養番組に対する人気は全く地におちている。

表 27 学級生がよくみるテレビ番組

順位	番組名	男	女	計
①	ジャズ、ミュージカル、歌謡曲	5	7	12
②	メロドラマ、ホームドラマ(日本)	4	6	10
③	ニュース、ニュース解説	4	5	9
④	時代活劇	5	4	9
⑤	西部劇	4	5	9
⑥	スポーツ	5	4	9
⑦	スリラー、アクションドラマ(日本)	5	3	8
⑧	文芸ドラマ	5	1	6
⑨	スリラー、アクションドラマ(外国)	3	2	5
⑩	舞台中継	4	1	5
⑪	ホーム・ドラマ(外国)	3	2	5
⑫	社会・教養	0	1	1
⑬	子供向き番組	1	0	1
⑭	クラシック音楽	0	0	0

10. 酪農振興とマス・コミュニケーション

大新青年学級生にとって、農業とくに酪農に関する情

報・知識を与える図書・雑誌・資料・放送等のマス・メディアは極めて重要であると思うが、どのような受けとり方がなされているであろうか。つぎに、これについて検討を試みたい。

(1) 農 業 雑 誌

よく読む農業雑誌として、学級生があげている雑誌は「農家の友」(5)と「デーリイマン」(2)である。全体の25%のみが農業雑誌を読んでいるにすぎない。読んでいる7名中男子は6名、女子は1名である。年齢は全部が20才以上であり、男子の高校卒業者(4名)は皆農業雑誌を読んでいる。

毎号読んでいるものは3名で、いずれも高校卒の男子である。他は時々読んでいる程度である。買って読むものは4名で、残りの3名は借りて読む。

農業雑誌の読み方をみると、全部の記事を読むというものは2名で、他は必要ところを拾い読みする程度である。中には数字に気をつけて読んだり、記事にアンダーラインを引いて読んだり、ノートをとりながら読むものもあるが、これらは高校出の青年達に限られている。

主に読まれる記事は酪農に関するもので、牛の繁殖障害、乳製品の価格等である。その他、病虫害、ビートの作り方もある。女子(1名)は料理を挙げている。

読んだ記事は余り利用されていない。利用したというものは2名で、1名は新しい薬品を買うのに役立ったと述べているが、買った薬品は使用しなかつたという。他の1名は役場で畜産関係の仕事をしているが、人との会話に役立つと述べている。

農業雑誌にのせてほしい記事を見ると、「牛についてもっと詳しく知りたい」(デーリイマン)「水田と酪農について記事があるが、酪農についてもっと詳しく書いてほしい」(農家の友)等の声に示されているように、もっと高度の知識を求めているようである。(第27表)

現在読んでいるかどうかは別として、学級生が読んだことのある農業雑誌は、「デーリイマン」(24)(男女各12)「農家の友」(18)(男女各9)「北農」(4)(男3, 女1)「農事組合だより」(3)(男子のみ)「農業北海道」(2)(男女各1)「北方農業」(1)(男子のみ)で、やはり「デーリイマン」「農家の友」両誌が一頭地を抜いて読まれている。

表 27 学級生が読んでいる農業雑誌

氏 名	性別	年令	学歴	農業雑誌	毎号読むか	入手法	借入先	読 み 方	主に読んだ記事	読んだ記事の利用法	利用結果についての感想	ほしい記事
M. H	男	24	高卒	デーリイマン	毎号	買 う		・全部読む ・数字を読む	・牛の繁殖障害	・利用しない		・牛についてもっと詳しく知りたい ・デーリイ・ジャパンを併読する予定
S. S	男	25	高卒	農家の友		借りる	勤務先(役場)	・必要なところを拾い読みする ・ノートをとる	・乳製品の価格	・人との会話で	・いろいろな事を知つていて悪くない	
Y. H	男	25	高卒	農家の友	毎号	買 う		・傍線を引く ・数字を読む	・酪農 ・病虫害	・新しい薬品を買う	・薬を買つたが使用しなかつた	・水田と酪農について記されているが、酪農をもっと詳しく
T. H	男	25	高卒	農家の友	毎号	買 う		・全部読む	・わからない	・日常生活に		・自分の生活に役立つ事柄
F. Y	男	25	中卒	農家の友		借りる	家 族	・必要なところを拾い読みする	・ビートの作り方	・利用しない		・今のままでよい
N. K	男	22	中卒	農家の友		買 う		・必要なところを拾い読みする	・わからない	・利用しない		
T. S	女	20	中卒	デーリイマン		借りる	隣 家	・必要なところを拾い読みする	・料理	・利用しない		

(2) 農 業 図 書

感銘を受けた農業図書を挙げたものは4名で、内訳は男子3名、女子1名、いずれも20才以上で、高校卒は2名である。書名は「NHKラジオ農業学校テキスト」

(2)「酪農学園通信教育テキスト」(1)「海外の農業」

(1)等である。

その読み方は、「ラジオ農業学校テキスト」は必要ところを拾い読みされているが、「酪農学園通信教育テキスト」を挙げた1名は、ノートを取り、書き入れをし農業辞典をひき、わからない個所を人にきくなど、多角的な勉強の仕方をしたようである。しかし読んだ本の利

表 28 学級生が感銘を受けた農業図書

氏 名	性別	年 令	学 歴	感 銘 を 受 け た 農 業 図 書	入 手 法	入 手 先	読 み 方	利 用 法	利用した結果 についての感想	ほ しい 農 業 図 書
M. H	男	24	高卒	「海外の農業」	借りる	公 民 館	・全部読む			
S. S	男	21	中卒	「酪農学園通信教育テキスト」 (4冊)	買 う	公民館で酪農通信教育を行なった際購入	・必要なところを拾い読み ・ノートをとる ・書き入れをする ・辞書(農業辞典)をひく ・切抜きをする ・わからないところを人にきく			
Y. H	男	23	高卒	「ラジオ農業学校テキスト」	買 う	青年学級で一括して購入	・必要なところを拾い読みする			・乳牛の飼養管理 ・病虫害
Y. S	女	22	中卒	「ラジオ農業学校テキスト」	買 う	青年学級で一括して購入	・必要なところを拾い読みする	・実際に作物をみて研究した	・やってみてよかった	

用法になると、余りはっきりしていない。今後はしい農業図書としては、乳牛の飼養管理並びに病虫害を挙げたものが1名あるほか、感銘を受けた農業図書を挙げなかった2名の青年からも、夫々乳牛に関する一般知識・家畜の飼料が挙げられている。なお農業に関する本はまだ読んだことがないというものが女子に2名あった。

(第28表)

(3) 農 業 資 料

農業資料とは農業関係官庁・農業試験場・農業団体等が作成・発行した各種資料(パンフレット類)を指す。これらの資料は図書や雑誌では得ることのできない貴重なデータを提供するが、大新の青年学級生にはどんな種類の農業資料が利用されているであろうか。

ためになった農業資料を挙げたものは6名(男4, 女2)で、全部20才以上である。高校卒は男子に1名ある。資料名は、北海道酪農協会発行の「北海道酪農協会通信」(速報版)が目立っており、(注)そのほかリーフ

レット程度のもと思うが、台糖(有珠郡伊達町に道南製糖所がある)のビート栽培に関する諸資料や八雲農協の養鶏に関する資料等がある。入手のルートは農協が多い。これらの資料は割合に丹念に読まれているようであり、読んだ後も、「乳価の変動に関心を持つに至った」「ビートの除草・薬剤散布の時期を知る」「卵を売る時の参考にする」等実際に利用されて効果がある模様である。

今後はしい資料としては、「牛の価格」「飼料別価格」「ビートの栽培」に関するもの、さらに資料を読まなかったという青年からも「読めばすぐに役立つ営農計画書」「瓶詰について」等実益を期待する資料が望まれている。(第29表参照)

一方、道農業改良課が農業改良普及員用に発行している「農業技術普及資料」を一度でも読んだことのある青年は1人もいない。学級生が読まないのは当然のことであるかもしれないが、普及員がその内容を咀嚼したものを、ぜひ学級生に与えてほしいと思う。

表 29 ためになった農業資料

氏 名	性別	年 令	学 歴	ためになった 農 業 資 料	入 手 方法	読 み 方	利 用 法	利用した結果 についての感想	ほ しい農業資料
S. S	男	25	高卒	酪農協会「酪協通信」	農協からもらう	・ノートをとる ・切抜きをする ・全部読む	・おぼえておく程度	・人との会話がうまいく ・会議に役立つ ・部落で役立つ	・新しい記事で、経営にすぐに結びつくもの
H. M	男	20	中卒	酪農協会「酪協通信」	農協からもらう	・全部読む	・友達との話し合いに使う		
K. K	男	22	中卒	酪農協会「酪農通信」	農協からもらう	・全部読む		・乳価の変動に関心をもつた	・飼料別の価格を記したものの
F. Y	男	22	中卒	酪農協会「酪農通信」	農協からもらう	・必要なところを拾い読みする			
T. S	女	20	中卒	台糖(伊達)の資料	台糖からもらう	・全部読む	・読んで参考にする	・除草や薬剤散布の時期を忘れた時に役立つ	・ビート、根菜類の病虫害除除、薬剤散布収穫適期に関するもの
M. H	女	23	中卒	八雲農協「養鶏卵の価格」説明書(チラシ)	農協からもらう	・傍線を引く	・卵を売る時に参考にする(どの位の価格で買入れるか知るのに役立つ)	・ためになる	・牛の価格について

大新青年学級生にとって今後、農業とくに酪農に関する図書・雑誌がもっと利用されなければならぬが、それとともに、とかく閑却されやすい各種の農業資料を蒐集し、一貫した目標の下に、これが利用をはかることが必要であると思われる。今後の青年学級の課題の一つとしてほしい。

(4) 農 事 放 送

① ラ ジ オ

青年番組・農事番組はほとんどきかれていない。「青年学級の友へ」「北海道青年学級放送講座」等青年学級生のために放送される番組をよくきく男子は1人もいない。

いということ、あながち放送時刻のせいばかりではあるまい。農事番組でも北海道放送（HBC）のものは余りきかれていない。（「おはようございます」）またNHKの場合、一口に「早起鳥」といっても、その中に含まれる個々の番組によって、きかれる程度が異なることが知られる。とくに人気があるのは、「天気予報」と「きょうの農作業」それにひる休みに放送される「ひるのいこい」である。（第30表参照）

大新の酪農青年は一般に農事番組を余り利用していない。しかし、よくきいている学級生に、ためになった点を主な番組毎に答えてもらった結果はつぎのとおりである。

表 30 学級生がよくきくラジオ番組（青年・農事）

	よ く き く			た ま に き く			ほとんときかない			合 計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
1. 若 い 世 代 へ	1	1	2	2	3	5	10	7	17	24
2. 青 年 学 校 の 友 へ	0	1	1	2	3	5	11	7	18	24
3. 北海道青年学級放送講座	0	2	2	1	3	4	11	6	17	23
4. 人 生 読 本	0	0	0	0	2	2	12	9	21	23
5. おはようございます										
(a) きょうの暦・トビックス	0	1	1	2	3	5	10	4	14	20
(b) 山幸・農事メモ	1	1	2	5	4	9	7	4	11	22
6. 早 起 鳥										
(a) 聴取者だより	1	2	3	1	1	2	11	8	19	24
(b) 解 説	2	1	3	2	3	5	9	7	16	24
(c) あ の 雲 こ え て	2	2	4	2	2	4	9	6	15	23
(d) 経 営 の し お り	2	2	4	2	3	5	9	5	14	23
(e) 天 気 予 報	4	6	10	1	2	3	7	4	11	24
(f) きょうの農作業	3	5	8	2	1	3	8	5	13	24
7. 村 の 広 場	1	4	5	3	0	3	9	7	16	24
8. 今 日 の 農 村	0	1	1	2	3	5	11	7	18	24
9. ひ る の い こ い	3	6	9	3	4	7	6	1	7	23
10. あ す の 農 作 業	2	3	5	2	2	4	9	6	15	24
11. 農 産 物 市 場 案 内	0	2	2	3	2	5	10	7	17	24

表 31 学級生がよくみるテレビ番組（青年・婦人・農事番組）

	よ く み る			た ま に み る			ほとんどもない			合 計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
1. 村 の 記 録	1	0	1	0	2	2	6	3	9	12
2. 朝 の 村 か ら	1	0	1	0	1	1	5	3	8	10
3. 村 の く ら し	0	0	0	0	0	0	6	4	10	10
4. 農 業 教 室	0	0	0	0	0	0	6	4	10	10
5. 産 業 映 画 教 室	0	0	0	0	1	1	6	3	9	10
6. 青 年 の 歩 み	1	0	1	0	0	0	5	4	9	10
7. 婦 人 の 時 間	1	1	2	0	1	1	5	4	9	12
8. 料 理 番 組	1	2	3	1	2	3	3	4	7	12

a 「あの雲こえて、

「昔の農村と今の農村のいきかたがためになる。川村というジヤサンはいいことをいう。」(24才, 男, 高卒)

「本道とは関係ないが, 地方色々豊かなよ番組だと思う。」(20才, 女)

b 「天気予報、

「農家の仕事のうち牧草の収穫にとくに役立つ。」(23才, 女)

c 「きょうの農作業、

「家畜の飼養法がわかる。」(22才, 女)

「作物の病虫害の防除について夏などくに役立つ。」(23才, 女)

d 「ひるのいいい、

「ゆったりした雰囲気がいい。」(19才, 男)

これはムード派であろう。

「方々の農家の様子が紹介されるのがよい。」(22才, 女)

e 「農産物市場案内、

「農産物価格の状況(上り下り)がよくわかる。」(22才, 女)

② テレビ

青年向き番組, 婦人向き番組, 農事番組はほとんど視聴されていない。もっとも学級生中テレビ所有家庭はわずか4戸にすぎないが, 家にテレビがある場合でも, 他の番組にくらべて, これらの教養番組は閑却視されている。青年向き番組や農事番組は青年達の間に全く浸透していない。(第31表)

しかし, これらの教養番組を青年達の学習や日常生活にとり入れる芽は存在するように思う。

例えば「村の記録」をよくみているという青年はたった1名しかいなかったが, この青年(24才, 男, 高卒)の家の茶の間には新しい立派なテレビが置かれていた。この番組のうち36年1月7日に放送された「新しい牧舎」について意見をきいてみた。これは愛知県の渥美農場を紹介したもので, ガムシャラに働く古い農業から, 1日8時間労働のサラリーマン農業を成功させようと, わが国で初めてというルーズ・バーン方式を採用し, 作業の能率化をはかったものである。この方式によれば, あと3年たつと, 3人の人手で60頭の牛を管理するという。この画期的な牛の管理方式に対して, 大新の1青年は自家の場合と比較しつつ, 明快な批判の言葉を寄せてくれたのである。即ち「渥美農場の方式は余り好きでない。牛の飼育を上手にやっていることは認める。乳は平均にしばれるが, 乳量は低いと思う。あの経営では間に合わない」と。この青年の場合, テレビの農

事番組は自家の農業経営と比較検討され, 立派に自分のものに消化されているのである。ラジオといわずテレビといわず, このような受けとり方がされるように, 今後指導の手をさしのべていくことが青年学級に期待できないであろうか。

(5) スライド

スライドは素朴な視覚教材であるが, 受け手に対して映画や放送では味はうことのできぬ独特の親和感と説得力を生む。ユネスコが未開発地域で行なった成人教育における視聴覚教材利用の諸実験によれば, 映画や放送は heterogeneous audience を対象とする場合に好適であるが, 一方スライドや録音テープは homogeneous group を対象とする際に適していると述べている。

ここでは大新の酪農青年という homogeneous group を対象として, 大新会館でスライドを映写し, 映写後感想を記させた。

使用したスライドは当社会教育研究室で制作したもので, 昭和35年秋全国の農業先進地を視察し, その一部を「前進する農業」シリーズとして4編のスライドにまとめたものであり, いずれも農業の共同化を主題としたものであるが, 大新で使用した作品は「久保さんと砂谷酪農」(神田三亀男著「酪農と人間」にもとづく) および「立間の農業法人」(愛媛県農政研究会著「四十一の農業法人」にもとづく)の2編である。つぎに両作品の概要を示す。

①「久保さんと砂谷酪農」(50コマ・カラー, テープ付30分)

<梗概> 広島県佐伯郡砂谷村は山間の部落で, その農家は, これまで水田に頼るほかになく, しかも, この水田も地力が低く収量が不安定で大部分の農家は借金に苦しんでいた。このような地区に乳牛が飼育され, 今日水田酪農のもっとも優秀な例として注目を浴びるに至ったのは, ひとえに久保政夫現砂谷酪農協同組合長と久子夫人の血のにじむような努力によるものである。久保夫妻が昭和16年八丈島から乳牛13頭, 仔牛10頭を引きつれて郷里に帰り, 開拓入植したのが砂谷村酪農化のはじまりで, 現在久保農場は酪農センターとして注目を浴びている。この作品は久保夫妻苦闘の跡をたどったものである。

②「立間の農業法人」(55コマ・カラー, テープ付30分)

<梗概> 愛媛県北宇和郡吉田町立間は有名なみかんの特産地であるが, 激化する階層分化, 大農具・設備への過剰投資, 潜在失業人口, 激しい市場競争等の問題を解決

するために、個人中心の農業経営から協同体の農業経営を確立することを考え、330戸の農家を41の部落法人に組織し農協を中心とした全村法人化によって近代的農業経営を実現しようと努めている。この作品は農業法人が結成されるまでの過程と問題を描いたものである。

当夜は以上の2作品を13名の学級生がみたのであるが、感想を提出したものは10名、そのほとんどが「砂谷酪農」について触れており、「農業法人」については関心を示さなかった。前者は大新と等しく酪農を中心とする点で共感を呼んだものごとく、後者は立地条件の相違のせいか、自分達の営農の問題とかみ合わせて考えることができなかったようである。以下、若干の感想文を示してみよう。

(1) 久保さんの経営について。

「土地の悪いのにもかかわらず2人で開墾にはげみ、又牛の方にも一生懸命になって未来の農業につくしてやっていくといった毎日の生活はなみなみならぬことだと思えます。

2人の愛情の中で農業を熱心に考えて、あのような山をブルドーザーなどの機械を入れて畑をふやす、又牛を53頭も扱い、畑は堆肥でこやし、うらやましいような作物ができ上がっていますが、これまでにするには2人はどれだけの苦労をしてきたことだろうと想像されます。私達の農業も久保氏のようにするには、農業に関した本なども多量に読み、どうしたらもうけて、どうしたら楽になるだろうということをつねに考えていなければならないのではないかと思います。一番感じた事は『借金をしない事』です。」(18才、女)

この青年は久保氏の読書について指摘しているが、久保氏は自らの農業を書物農業と呼び、農学や経営の知識を豊富に身につけている。農場の30枚のムシロをしきつめた広間には8,000冊の蔵書を書棚に並べ、その半分が農業図書、半分は文学・哲学・芸術に関する書物であり、自由に組合員に開放しており、一大農村図書館の観を呈する。スライドのこの場面が感銘を与えたようである。

(2) 久保さんの農業計画と私達の農業計画

「私達の農業は広島県の農業のように機械又はその他のいろいろな面でずいぶんおけているので、これからの農業は広島のように機械類又は車を入れてやって行かなければならないと思えます。

私の家では現在牛が11頭、馬2頭、鶏25羽を飼っておりますが、私の父も母もあまり身体がよくないため今まで苦勞して馬をつかったり畑をやって来ました。私もこれからの農業をよりよい農業にしたいと思っております。」(23才、女)

す。」(23才、女)

この例では機械の導入を重視しているが、そのほかにも砂谷の久保農場にぜひ一度行ってみたいというものが2名あった。総じて女子は、スライドから具体的な内容をつかみ出して、自家の経営と比較を試みている。

男子の場合は内容を一般化して把握しているように見受けられるが、これは報告者がいずれも高校卒であることも考慮に入れる必要があろう。

(3)「①、これからの農業は多角経営でなければ成立しない。②、個々の農家が自分の経営の内容を良く知り労働力ばかりに頼らず、機械化することも必要ではないか。③、共同経営についても考えてみたらどうか。④、現在の農業は昔の農業とちがって、各自がもっと勉強し農業の実体を良く知る必要がある。」(23才、男)

(4)「①、久保さんの経営の根本はあの多くの書棚の本より生れて来たものであり、研究心の旺盛さに感心した。②、堆肥の増産により、地力を増進させることはどこでも同じ原理であることをあらためて認識した。③、農業法人化について、農民のマンネリズム的自己強調心の統一の努力に敬服した。④、両編を通じ、農業は土に生きるだけのものでなく、人間と人間の力の結集が必要であり、この主体となる人物は精神を貫ぬく哲学者的知識を必要とすることに気付いた。」(25才、男)

なお、現在大新部落では共同化への意欲はみられないということである。

(6) 農事についての相談相手

農事に関する学級生の質問に親切に相談に乗ってくれる人は農業改良普及員と父親が一番多いことがわかった。これはとくに男子の場合に顕著である。普及員の中でも普及所長(当時)の都築重雄氏と名ざしたものが4名もいたことは、同氏の大新部落に対する指導力の一端を示すものであろう。女子では農事に関する質問の相談相手がいないことが極めて多いが目立った。

表 32 農事に関する質問の相談相手

	男	女	計
普 及 員	5	1	6
父	4	2	6
母	1	2	3
兄	1	1	2
隣 人	1	0	1
知 人	1	0	1
友 人	0	1	1
な し	3	8	11

(注) 北海道酪農協会発行の「北海道酪農協会通信」(速報版)は「酪協通信」と略称され、月3回発行。B5判。1回4頁である。主要内容は、酪農時事、経済(飼料等)動向等で、道内の酪農家が読む。発行部数は約5,000部、会員である農家に配布されるほか、支部にも送られる。また希望者には無料で配布される。

11. 北海道ラジオ農業学校と大新青年学級生

種々のマス・メディアとの接触について述べてきたが農村青少年教育の充実をはかるための新しい方法として最近注目を浴びるに至った「ラジオ農業学校」は大新青年学級生に、どのように受け入れられているか考察してみたい。ここではまず、「北海道ラジオ農業学校」について概要を紹介することにしたい。

(1) 北海道ラジオ農業学校の概要

ラジオ農業学校は昭和35年4月NHK新潟放送局が行なって好評を博したのが、その端緒で、農林省では昭和36年度予算に1,000万円を計上して全国的な規模に拡大するに至った。

この年北海道農務部では農業近代化を進める対策の一つとして、中学校卒業後学習の機会に恵まれぬ農村青少年を対象に「北海道ラジオ農業学校」を開設した。

本道農村では農業後継者は中学校卒業者が多いので(約80%と推定される)、農業に関する基礎的知識・技術が未習熟のまま農業経営にたずさわる青少年を対象として農業の基礎的知識・技術を付与し、企業的農業の担い手にしようというのが目的であり、いわば青年学級の

農業課程というべきものと考えられた。

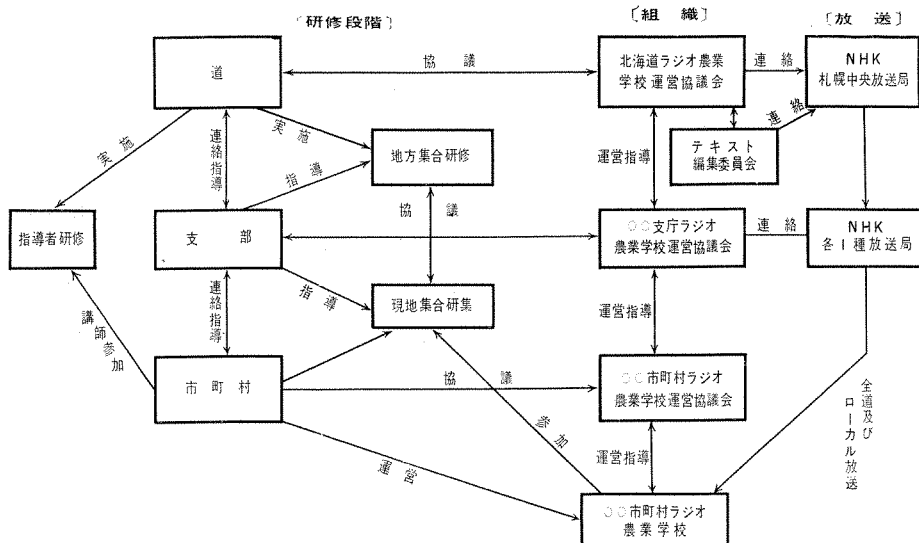
その方法はテキストにもとづき、ラジオ放送を聴取し知識の習得をはかるとともに、現地集合研修によって技術を身につけさせようとするものである。以下北海道農務部「北海道ラジオ農業学校実施要領」に拠って、その内容を示すことにする。

- ① 対象 主として15才から18才までの農村青少年。
- ② 期間 毎年4月から翌年3月までの1年間。
- ③ 教育内容 農業に関する基礎的知識・技術の付与を重点としてつぎの6課程による。学習程度は農業高等学校における教育程度に準ずる。
 - (1) 基礎学習 植物及び動物の生理、土壌、農業機械気象、栄養に関する知識・技術
 - (2) 作物学習 各作物の生産に関する知識・技術
 - (3) 家畜学習 家畜の飼養管理に関する知識・技術
 - (4) 経営学習 農業経営に関する知識・技術
 - (5) 農村生活学習 農村社会と農家生活に関する知識・技術
 - (6) 地域課題解決学習 地域的課題解決に必要な知識・技術
- ④ 教育方法 ラジオ放送並びに現地及び地方集合研修を併行する。

(1) ラジオによる教育

ラジオ放送 毎週月曜日から金曜日まで放送する。(NHK札幌中央放送局第2放送午前6時30分から15分間)「ラジオ農業学校放送テキスト」を教材として学習する。金曜日はローカル放送で地域に

第3図 北海道ラジオ農業学校推進体制図



密接な問題を取り上げる。

- (2) 現地集合研修 市町村が毎月1回以上行ない、各種施設、現物の活用による実技の付与を主とする。講師は主として改良普及員。

- (2) 地方集合研修 支庁地域を単位として道が年1回以上行ない、現地集合研修を経たものを対象とする。講師は主として放送者。

- ⑤ **推進体制** この事業の実施に必要な事項を協議し、その推進をはかるため、道、支庁、市町村段階にラジオ農業学校運営協議会を設置する。なお詳しくは第3図を参照のこと。

- (1) 北海道ラジオ農業学校運営協議会

北海道、北海道教育委員会、NHK札幌中央放送局、北海道農業会議、北海道農業協同組合中央会、北海道市長会、北海道町村会、北海道青少年問題協議会等の代表者及び学識経験者をもって構成する。

- (2) 支庁ラジオ農業学校運営協議会

道に準ずる関係者をもって構成する。

- (2) 市町村ラジオ農業学校運営協議会

市町村、市町村教育委員会、地区農業改良普及所市町村農業委員会、農業協同組合、中学校、高等学校等の代表者および学識経験者をもって構成する。

- ⑥ **ラジオ農業学校の運営** 市町村長が校長として開設し、関係機関、団体が推進組織を設ける。

- (1) 修了証書の交付 毎年、修了者に対して判定を行ない、合格者に修了証書を与える。

- (2) 他学習集団との連携 この事業は、その効率的な展開をはかるため、青年学級、農村青少年クラブ等の学習集団と密接な連携のもとに実施するものとする。

(2) 北海道ラジオ農業学校の実施状況

道農業改良課の調査によれば、昭和37年8月現在、北海道ラジオ農業学校の全道受講概況はつぎのとおりである。(第33,34表参照。昭和36年度については、十分な資料が得られなかった。)

ラジオ農業学校開設に当たっての対象は、主として18才未満の農村青少年であったが、実態は25才未満の青少年が10,963人(63.8%)、26才以上が6,198人(36.2

表 33 ラジオ農業学校の受講状況(全道)

道農業改良課調査

テキスト 利用部数	受講者総数	年齢段階別受講者数			性別受講者数	
		20歳以下	21～25歳	26歳以上	男	女
部 23,448	人 17,161	人 6,855	人 4,110	人 6,198	人 14,451	人 2,701
率	% 100	% 39.9	% 25.9	% 36.2	% 84.2	% 15.8

表 34 市町村におけるラジオ農業学校実施状況
(抽出調査平均) 道農業改良課調査

受講 者数	受 講 者 別						現地集合研修		
	中 在 学 中	中 学 卒 3 年 以 内	高 校 在 学 中	高 校 卒 3 年 以 内	左 以 外 の 婦 人	青 壮 年	平 均 回 数	受 講 者 数	1 回 受 講 者 数
人 114	—	人 25	人 6	人 7	人 4	人 72	5.4	188	34
率	—	% 22.0	% 5.3	% 6.1	% 3.5	% 63.1	—	—	—

%)で、農業をやらなければならぬという意欲をもってきているのは26才以上であるともいえるし、この中には60才以上の人もいっていることである。

一方全道各支庁から1カ町村を任意に抽出した調査結果によれば、その平均値では中学卒3年以内の青少年の参加率は22.0%、高校在学中の者5.3%、22才以上の青壮年が63.1%受講している。またこの事業の特質である現地集合研修には188人が参加し、年5.4回の開催数で、平均1回の参加者数は34人である。

道農業改良課が指摘するラジオ農業学校の問題点はつぎのごとし。即ち、①低年齢青少年の積極的参加が少なく、受講者が年長者に偏っていること。②テキストだけの利用者があり、ラジオ聴取・現地集合研修が有機的に行なわれていない。(受講者総数17,161人に対して、テキスト利用部数は23,448部に達している)

なおテキストの評判は全国的にすばらしいものがあり昭和36年7月現在全国で32万部の売れ行きを示し、中にはプレミアムつきで売られるという地方が出現するに至った。32万部という数字は、これまで最高といわれた料理テキストの倍以上の成績であるという。

③関係機関団体との連携が不十分なところが認められ、このような地区では普及所だけの活動になりがちであり、社会教育関係者はシャット・アウトされるという事態を生ずることになった。

④この事業の内容が十分に徹底していない点が認められる。つまり広報活動も万全を期したものとはいえない。

(3) ラジオ農業学校と大新青年学級生

① 知った媒体

学級生中「ラジオ農業学校」が放送されていることを知っているものが23名(男12,女11)で82.1%、知らないものが5名(男2,女3)である。(17.9%)知らないものの中、家庭にラジオが無いものは1名、あとの4名はラジオがある。

つぎに「ラジオ農業学校」を知っているもの23名について知った媒体をみると、青年学級で知ったというものがもっとも多い。(11)これにつぐのがラジオ(7)

である。ラジオで知ったものには女子が多い。(6) 以下、新聞(2)、役場・教育課長・普及員・小学校の先生・先輩・家族(各1)となっているから、この場合、「青年学級」と「ラジオ」とが知った媒体としてもっとも強力であるといえる。

② 聴取状況

「ラジオ農業学校」を知っているものについて、実際にきいているかどうかみると、「きいている」が11名(男7, 女4)で学級生総数の39.2%, 「きかない」が17名(男7, 女10)で60.8%を占める。「きいている」ものは「知っている」ものの約半分である。「きかない」理由は、「他に仕事あり」(3), 「他の番組をきく」(3), 「時間の都合悪し」(2)等が主なものである。

「きいている」ものがどのくらいきくかみると、「ほとんど毎日きく」が1名(男22才)で、この青年は牛舎にラジオを持ちこんできくほど熱心である。「週2~3回」が2名(女2), 「週1回位」が1名(女)で、あとは「ごくたまにきく」が5名(男3, 女2), 「はじめは毎日きいたが今はきかぬ」2名(男)となっている。つまり、週1回以上きくのは男子1名, 女子3名である。年令別にみると、19才未満の男子4名は、その内1名が「ごくたまにきく」程度で他は全くきいていない。同じく19才未満の女子では1名もきくものがない。年少者には、「ラジオ農業学校」は無縁の存在といってよいようである。学歴別にみると、高校出の男子4名中「ごくたまにきく」が1名, 「はじめは毎日きいたが今

はきかない」が1名, 残りの2名は全くきいていない。高校出の女子1名もきいていない。学級生中高校出の青年にはラジオ農業学校はきかれていない。

以下の記述に当っては、低年令層及び高校出はラジオ農業学校に関心を示さぬものとして、この場合、これらの層を特別に考察することを省略したい。

一応きいている者12名が、何月からきいているかみると、放送開始の4月からが7名(男6, 女1) 5月2名, 6月, 1名, (女) 37年1月からが1名(男)という状況を示す。

③ ためになった番組

「ラジオ農業学校」をきいた結果, 「ためになる」というものは7名(男4, 女3)で、週1回以上きくものは、いずれも「ためになる」と答えている。「酪農・一般農業ともによくわかる。自分でわからぬところを親切に教えてくれる」という学級生もいる。(20才女子)その他では「大体ためになる」(1), 「少しためになる」(1), 「余りためにならぬ」(2)という結果を示す。

放送内容について各学習毎に具体的内容を示し、どれがためになったか検討するとつぎのごとし。

農業基礎学習, 畑作物学習, 畜産学習, 農村生活学習は夫々ためになったとされるが、水稻学習・地域課題解決学習(ローカル放送)に関しては、ためになったとするものが1名もない。ためになったという具体的内容は、甜菜, 飼料作物, 馬鈴薯, 家畜生理, 畜産一般, 乳牛の飼育, 酪農経営等が多い方である。いずれも八雲町の農業生産と密着した内容である点に注意を払いたい。

表 35 ためになった放送内容

学 習 内 容	計	(男)	(女)	学 習 内 容	計	(男)	(女)	学 習 内 容	計	(男)	(女)
I 農業基礎学習				5. 稲の育て方	0			12. 果 樹	0		
1. 家 畜 生 理	7	(6)	(1)	6. 稲の病虫	0			13. 輪 作	0		
2. 病 害 虫	4	(2)	(2)	7. 水田の改良	0			IV 畜 産 学 習			
3. 農 業 経 営	4	(3)	(1)	8. 水田の経営	0			1. 畜 産 一 般	6	(4)	(2)
4. 生理衛生と栄養	4	(1)	(3)	III 畑 作 物 学 習				2. 乳牛の飼育	6	(4)	(2)
5. 土 壌 肥 料	5	(2)	(1)	1. て ん さ い	8	(6)	(2)	3. 畜 農 経 営	5	(3)	(2)
6. 気 象	5	(2)	(1)	2. 飼 料 作 物	8	(6)	(2)	4. 養 豚	3	(2)	(1)
7. 農 機 具	1	(1)	(0)	3. じやがいも	7	(5)	(2)	5. 馬 の 飼 育	2	(2)	(0)
8. 農 家 簿 記	1	(0)	(1)	4. 土 壌 保 全	2	(1)	(1)	6. 養 鶏	2	(2)	(0)
9. 植 物 生 理	0			5. 畑 作 経 営	2	(0)	(2)	V 農 村 生 活 学 習			
10. 営 農 林	0			6. 穀 類	1	(0)	(1)	1. 明るい家庭生活	3	(0)	(5)
II 水 稻 学 習				7. そ さ い	1	(0)	(1)	2. 農 村 社 会	3	(1)	(2)
1. 本 道 の 稲 作	0			8. な た ね	1	(0)	(1)	3. 農繁期の暮らし	2	(0)	(2)
2. 種 も み	0			9. 豆 類	0			4. レクリエーション	1	(1)	(0)
3. 苗 し ろ	0			10. あ ま	0			VI 地域課題解決学習	0		
4. 水 田 の 作 業	0			11. 工芸作物の病虫	0						

ためになった放送内容で著しい男女差があったものは、家畜生理・甜菜・飼料作物・馬鈴薯である。これらにはとくに男子が関心を示した。また農村生活学習は主に女子に歓迎されている。(第35表参照)

④ ローカル番組

さらに毎週金曜日にはローカル番組が組まれ、地域課題解決学習として、渡島・檜山地方向きに函館放送局から番組が流されるが、大新青年学級生で、このことを知っているものは、わずか4名(男1, 女3)で、他の19名は「ラジオ農業学校」を知ってはいても、ローカル番組の存在を全く知らぬのである。ローカル番組は、
「(一) 地域に適した農作物の栽培や家畜の飼い方を理解し、(二) 地域に適した技術を身につけ、(三) 地域にはいかなる農業経営がよいか考える」(「NHKラジオ農業学校テキスト」'61) ことを狙いとするというが、実際にはこの「ローカル番組」が他の曜日(月～木)の番組よりとくに別のためになると考えているものは1名もいない。その中には函館放送局の番組はよく入らぬし、室蘭局から放送される分をきいても、八雲の農業経営にあてはまらぬという答えもきかれた。(ローカル番組は函館からの放送がきこえないため受講が不可能な状態なので、昭和37年度からは現地研修の際、放送済みのテープを使用、受講しているという)

⑤ ラジオ農業学校に対する意見・希望

「ラジオ農業学校」でやってほしいと思う放送題目としては、「農政時事」「家畜」を挙げたものが各1名ある程度で、積極的な関心はみられない。そのほか「ラジオ農業学校」に対する意見や希望をみると、つぎのごとし。

(一) 放送時刻 午前4時半(1), 午前5時(1), 午前6時(1), 現在(午前6時半)のままでよい(2), 午前7時(3)(但し冬期のみ午前7時がよい1名を含む) 午後8時(2), 午後9時(2) という具合に全く区々である。

ここで参考に記すと、NHKでは各地の要望に応じ、37年度から「ラジオ農業学校」の放送時刻をつぎのように改正した。

(4～10月)

第1放送 午前5.45～6.00 月～土

第2放送 午前6.40～6.55 月～土

第2放送 午後7.30～8.00 水・木・金(再放送)

(11～3月)

第2放送 午前6.40～7.00 月～土

第2放送 午後7.30～8.00 水・木・金(再放送)

早朝番組はとりやめ。なお昭和38年1月からFM実

験放送でも夜間、ラジオ農業学校が放送されるに至っている。

(二) 放送時間の長さ 現在は15分間であるが、「現在のままでよい」(9)が多く「30分間にしてほしい」(2)という意見もあった。

(三) 講師について ほとんど意見はないようで、「現在のままでよい」が4名である。「はっきりわかるようにやってほしい」というものが1名あった。

(四) その他 「質問をできるようにしてほしい」「HBCでラジオ農業学校をやってほしい」というものが各1名あった。

⑥ テキストについて

「ラジオ農業学校」テキストは学級生中16名(男女各8名)が所持し、これは総数の57.1%に当る。そして16名中15名が一応はテキストに目を通している。目をとさない1名は、「強引に買わされたので持っているだけ」であるという。

テキストに目を通したものが、具合がよいという点は「家畜・畑作物が詳しいでいること」「カットが入り、スッキリ仕切られていること」「断片的でくどくない」等である。一方悪い点は「水田は必要がないので酪農一本にしてほしい」「地方に適したテキストを作してほしい」「説明をもっと詳しく」「写真が少ない」等である。

さらにテキストに対する希望としては、「もっと型を小さくすれば携帯に便利である」「グラフ等を多く入れてほしい」「料理のことを入れてほしい」等の声がある。以上のうち「説明をもっと詳しく」というのは、放送をきくことがないため、テキストだけに頼ろうとしているのであり、放送とテキストが有機的に一体化して考えられていない証拠である。今後の運営に一考を要する問題であろう。

テキストの利用方法をみると、「学級で講義と関連あるところを読み、余白にノートをする」「テキストをみてトマトを作った」(女子)等が注目すべきもので、他はひまな時にみたり、必要な箇所を拾い読みする程度である。

⑦ 現地集合研修

「ラジオ農業学校」には現地集合研修(スクーリング)があるが、この制度を知っているものはわずか2名(男女各1)である。他の者は全然知らない。これは当然であるかもしれない。八雲町では現地集合研修が37年1月末まで実施されていなかったのである。道農業改良課発行の「農業技術普及資料」(特集＝農村青少年教育のすすめ方と北海道ラジオ農業学校指導の手引、昭和

36年7月)によると、「農村青少年に対し、農業に関する基礎的知識技術の付与をねらいとするこの事業における現地集合研修の役割りは極めて重要であり、現地集合研修が実施されなければ、単なるラジオ講座としての価値しかないことにもなる」とあるが、現地集合研修が永く実施されなければ、せっかくの事業も「仏作って魂入れず」という諺どおりの結果になってしまうであろう。

現地集合研修について一女子青年は「現地集合研修はあった方がよい。以前野幌酪農学園の通信教育でも集合教育に講師が来てくれ、スゴクよかった」という見解を披瀝している。(八雲町では昭和37年度から現地集合研修が実施されている)

⑧ 資格付与の問題

現在の継続教育において、それが各種学校・社会通信教育・青年学級のいずれであるを問わず資格付与(クレジット)の問題が重要な課題となっている。今回のラジオ農業学校においても、勉強した人になんらかの資格が与えられたらよいかきいてみた。「資格が与えられたらよい」とするものは6名、「与えられなくてもよい」が14名で他は意見がなかった。資格付与について、切実な問題として考えてはいないようにみうけられる。「資格が与えられたらよい」と答えたものは資格自体については「学歴」「高等学校卒業のような学歴」「修了証書をもろう程度でよい」(各1)と述べている。

⑨ 青年学級との関係

「ラジオ農業学校」と青年学級との関係をみると、この放送を学級に使用したらよいと考える学級生が23名(82.1%)の多きにおよんでいる。学級生はなんらかの方法で「ラジオ農業学校」を青年学級にとり入れたいと考えているわけである。

ところで「学級で使用すればよい」とするものが、どうすれば青年学級で使用できると考えているかきいてみると、つぎのように種々な意見がある。その中主な意見を記すと、

(一)ラジオで放送されたことを講義もしてもらい、みなでよく話し合いをする。(二)学級の時間表に放送番組をくみ入れる。(三)放送を録音テープにとって利用する。(四)普及所から講師を頼む。(五)講師が内容に即してテキストを利用し講義する。(六)講師が来ない場合利用する等である。

⑩ 家族・友人とラジオ農業学校

学級生の家族で、「ラジオ農業学校」をきいている人は、父(8)、母(2)、兄(3)で、父親が割合によくきいている。

つぎに学級生中「ラジオ農業学校」の番組について、人といっしょに勉強するというものは1名もいなかった。これは「ほとんど毎日きく」ものが1名しかいない現状では、やむを得ないことであるかもしれぬ。

⑪ 町の運営

町のラジオ農業学校長は町長がこれに当たっているが、ラジオ農業学校長は「ラジオ農業学校」について熱心であるかどうか意見をきくと、「わからない」「無記入」を除く22名中、「熱心である」と思うものは2名、他は全部「熱心でない」と答えている。「熱心でない」という理由は、「やっていないところをみれば熱心でないのだろう」「町長がラジオ農業学校長になっていることも知らなかったくらいだから、校長はいないようなものだ」「1年に1度くらい現地研修をした方がよい。新庁舎もできたことだから、今度はやるのでないか」等の批判に尽きようである。

⑫ 来年度ラジオ農業学校に対する希望

最後に来年度(37年度)行なわれる「ラジオ農業学校」に対する希望としては、以下のごとき声が寄せられた。

(一)これからはラジオは皆がきかないので、ラジオ農業学校は無駄ではないか。

(二)ラジオ農業学校をテレビでやるともっと効果があるだろう。

(三)農家の人がきくのだから、放送時刻を都合のよい時間にしてほしい。

(四)今の程度ではやさしすぎる。もう少しすんだ内容でもよい。

(五)いろいろな牧場の経営内容を紹介してほしい。

(六)農業基本法についても説明してほしい。町の酪農生産拡充5カ年計画その他酪農に関する諸計画(国・道)も常識としておぼえておきたいので放送してほしい。

⑬ 要 約

以上大新青年学級生の間におけるラジオ農業学校の利用状況を考察したが、昭和37年1月当時では、この企画は十分な効果を発揮していない。

かつて、ラザースフェルト(P. F. Lazarsfeld)が、その著書「大衆のラジオ観」(The People Look at Radio 1946)において、ラジオの教育的機能におよび、①放送教育は、それを真に必要とする人々に達することが少ない。②教育番組で学ぼうとする時には、事前に一定の訓練が必要である。③教育放送の位置づけについては、継続的・組織的評価が真に必要である。現状に関する組織的なデータが極めて必要である等一連の主張に表現された示唆は、今後のラジオ農業学校の運営に際しても、十

表 36 大新青年学級生と農業に関するマス・メディアの接触状況

番 号	性別	年齢	世帯主 と続柄	学歴	役 職	経営 面積 町	年間 乳牛生産 量 キログラム	耐 ミ シ ン	消 電 洗 機	財 テ レ ビ	青 オ バ イ カメラ	青年学級で興 味のあつた事柄	読んだ農業雑誌・図書・資料		聴 視 し た 農 事 放 送		農業技術、知識等 導 入 の パ ー ソ ナ ル ・ ル ー ト	備 考
													種 類	利 用 法	ラ ジ オ	テ レ ビ		
① M.H	男	24	長男	高卒	カール同志会会 長	10.0	39,368 (100石会7 位関脇)	○	○	○	○	農業生産 牛の飼育	「デーリイマン」 「海外の農業」		「早起鳥」(全部) 「村の広場」	「村の記録」 「婦人の時間」	・普及員 ・共進会(部落・町 道南・全通) ・酪農視察旅行(日 高・札幌・江別・ 遠浅) ・冬季学校	雑誌+放送 +共進会+ 視察+講習会 +普及員
② T.S	男	21	2男	中卒	大新青年団幹事	5.5	20,438 (100石会 130位前頭)	○			○	な し	「酪農学園通信 教育」		「早起鳥」 (天気予報)		・普及員 ・共進会(部落・町) ・立岩農家視察	図書+ 共進会 +視察 +普及員
③ S.S	男	25	2男	高卒	青年学級運営委 員 八青協事務局長	7.5	17,000	○			○	時事問題	「農家の友」 「酪農通信」	会話の時利用	「あすの農作業」		普及員	普及員
④ Y.H	男	23	長男	高卒	大新青年団長 東青協副会長 青年学級事務担 当者	8.1	30,619 (100石会56 位前頭)	○	○	○	○	飼料計算	「農家の友」 「ラジオ農業学 校テキスト」	新しい薬品を 買う時参考に なる			・普及員 ・共進会(町) ・酪農視察旅行(羊 蹄山麓) ・冬季農校	雑誌+ 共進会+ 視察+講習会
⑤ H.M	男	20	2男	中卒		6.5						合 唱	「酪農通信」	友達との会話 に使う	「ひるのいこい」		・父	家族内コミュニ ケーション
⑥ K.K	男	22	長男	中卒	大新青年団幹事	8.0	14,000					乳牛の飼養管理	「酪農通信」		「ひるのいこい」 「ラジオ農業学校」		な し	放 送
⑦ T.K	男	19	長男	中卒		6.0	3,750					乳牛の飼育管理			「早起鳥」(おの雪こえて 天気予報、きょうの農作 業)「ひるのいこい」		・隣の主人(農家)	放送+ 農家間コミュニ ケーション
⑧ Y.O	男	19	長男	中卒		15.0	28,785 (100石会47 位前頭)	○	○		○	わからない					・父母	家族内コミュニ ケーション
⑨ G.I	男	18	長男	中卒		6.0	12,169					フォークダンス 合唱					・父	家族内コミュニ ケーション
⑩ R.K	男	19	長男	中卒		9.5	21,301 (100石会 116位前頭)	○				スポーツ					・なし	
⑪ T.H	男	23	2男	高卒		11.5	27,309 (100石会50 位前頭)	○	○	○	○	乳牛の飼育管理	「農家の友」		「山の幸」 「早起鳥」(解説、経営の しおり、天気予報、きよ うの農作業)	「朝の村から」 「青年の歩み」 「料理番組」	・普及員 知人(農家)	雑誌+ 放送+普及員
⑫ F.Y	男	22	5男	中卒		8.2	14,860					酪業経営	「農家の友」 「酪農通信」				・兄	雑誌+ 家族内コミュニ ケーション
⑬ Y.Y	男	22	長男	中卒		12.2	7,404					な し					・父	家族内コミュニ ケーション
⑭ N.K	男	20	2男	中卒		10.5	26,309 (100石会60 位前頭)	○			○	飼料計算	「農家の友」				・なし	雑誌

⑩ T.S	女	20	養女	中卒	(以前、青年学級運営委員)	5.0	9,811	○					酪 農	「デーリイマン」 台糖「ビートに 関する資料」		「早起鳥」(全部) 「村の広場」 「あすの農作業」 「北海道青年学級放送講 座」 「ラジオ農業学校」		・普及員 ・講習会 (衣・食・住・衛 生)	雑誌・資料+放 送 +普及員	
⑪ Y.I	女	18	長女	中卒		6.0	14,000	○					料 理			「ひるのいこい」		・なし		
⑫ S.K	女	20	長女	中卒		8.4	11,892	○					合 唱					・なし		
⑬ N.H	女	18	長女	中卒		13.3	30,619 (100石会37 位前頭)	○			○	○	礼儀作法 生 花			「早起鳥」(天気予報) 「村の広場」 「ひるのいこい」 「若い世代へ」		・なし		
⑭ Y.S	女	22	4 女	中卒	大新青年団 会計	7.5	17,000	○			○		料 理 時事問題	「ラジオ農業学 校テキスト」	実際に作物を みて研究した	「早起鳥」(天気予報) 「あすの農作業」 「ラジオ農業学校」		・父	放送+ 家族内コミュニ ケーション	
⑮ M.I	女	25	2 女	高卒	(以前、大新年 団副団長)	10.6	31,268 (100石会29 位前頭)	○			○	○	生 花				「料理番組」	・なし		
⑯ K.O	女	23	4 女	中卒		15.0	28,785 (100石会47 位前頭)	○	○				合 唱 フォークダンス					・父 ・酪農視察旅行(羊 蹄山麓)	家族内コミュニ ケーション +視察	
⑰ K.O	女	21	2 女	中卒		3.8		○					合 唱 フォークダンス	「酪協通信」				・なし		
⑱ S.Y	女	22	2 女	中卒		4.4	11,373	○					音 楽			「おはようございます」 (全部) 「ひるのいこい」 「農産物市場案内」		・なし	放送	
⑲ Y.M	女	19	姪	中卒		8.7	9,278	○					礼儀作法					・母		
⑳ M.H	女	23	4 女	中卒		11.5	27,287 (100石会50 位前頭)	○	○	○	○	○	小家畜の世話	「八雲農協一 養 鶏のリーフレツ ト」	鶏卵を売る時 に参考にする 業)	「早起鳥」 (天気予報、きょうの農作 業)	「婦人の時間」 「料理番組」	・兄、母	資料+ 家族内コミュニ ケーション	
㉑ S.H	女	22	長女	中卒		6.5	15,000	○					料 理			「早起鳥」(聴取者だより 天気予報、きょうの農作 業)「村の広場」 「今日の農村」 「ひるのいこい」 「あすの農作業」 「農産物市場案内」 「青年学級の友へ」 「北海道 青年学級 放送講 座」 「ラジオ農業学校」		・なし ・酪農視察旅行 (羊蹄山麓)	放送+視察	
㉒ Y.N	女	24	5 女	中卒	青年学級運営委員	10.0	20,869 (100石会 123位前頭)	○				○							・友人(青年学級生) ・野幌三愛塾で料理 の勉強(2週間)	講 習
㉓ M.K	女	18	2 女	中卒		8.4	11,892	○					料 理			「早起鳥」(あの雲こえて 天気予報、きょうの農作 業)「村の広場」 「ひるのいこい」		・なし		

分考慮するべき点があるように思われる。

12. 総 括

学級生のマス・コミュニケーション接触状況について検討する時、酪農に関する知識・技術を導入するに際して、文字によるメディア、放送によるメディアをフルにとり入れていると目される者は辛うじて1名をかぞえるにすぎない。しかし、この1名も農業図書の活用は決して充分とはいえない。(第36表①) 個々の青年が属する農家の現実の所得額の大小とマス・コミとの接触状況を関連づけることは困難に思われる。このことは第36表中の100石会上位にある農家の子弟が必ずしも、農業に関する情報をマス・メディアから摂取していないことから察知しうるところである。

全般的には、図書・雑誌・資料等の利用が極めて少ないことが注目される。放送もかなり利用されているとはいえ、その浸透の程度は低い。つまりマス・メディアは有機的に且つ総合的に使用されていない。

技術・知識の導入は講習会・共進会・視察・普及員の指導等によって推進される場合がかなり多い模様であるが、これとても一部の者に限定されている感がある。

現在のところ、技術・知識の導入においてなお家族内コミュニケーションがつよい作用をおよぼしているようであるが、女子の場合はマス・メディアが何等利用されないだけでなく、この家族内コミュニケーションさえもすることのできぬ場合が、かなり存在することを知るのである。(第36表参照)

13. 結語—産業図書館の構想

以上、大新青年学級生とマス・メディアとの接触について述べてきたが、八雲町教育委員会の資料「大新青年学級第2集」(昭和34年)によれば、本青年学級の隘路はつぎの諸点に要約されるが、それはまた現在の問題点としても考え得るところと思う。即ち、

- (1) 不入学者の問題。
- (2) 学習意欲の少ない学級生の存在。(とくに 未成年者に多い)
- (3) 始業時間と終業時間の問題。
- (4) 設備及び資料の不備。
- (5) 能力差、性別差、年令差の存在。

以上の隘路のほかに、マス・コミュニケーションとくに農業・酪農に関するマス・コミュニケーションの受け入れ方がきわめて不十分であることを指摘したい。大新

青年学級生の場合優秀な青年2名が調査当時不在であったことも考慮しなければならぬ。(1名はデンマークで実習、1名は野幌酪農学園で研修中) また今回の調査結果をもって、大新部落青年の縮図として一概に断定することもできないであろう。しかし、農村青年は一般に読書しないと称される。週刊誌を読む程度が精一杯だとの声もきかれる。

大新青年学級生男子青年の場合は1名を除いて他は一応全部農業後継者と目されているとのことである。大新の青年達は「賢くなければ酪農はできない」という。しかし賢くなるためには、図書・雑誌・資料・映画・放送・スライド等のマス・メディアを精選して、これを自分達の学習や生活に大いにとり入れることを考えなくてはならぬ。

そのためには、青年学級において各種の資料が充実されなければならない。また読むことや視聴することの指導者が求められなければならない。

現代にあって流布されるマス・メディアの利用をはかることによって、青年達が実力を身につけ大新部落においては八雲町の酪農振興に寄与することが期待できようしまたそのための努力が致されなくてはならぬと思う。マス・メディアの利用はひとり大新青年学級の問題であるばかりでなく、生産と生活とに直結する学習を狙いとする全道の青年学級やその他の社会教育機関にとって大切な問題なのである。

この意味で生産と生活とに直結する内容をもつ図書館を仮りに「産業図書館」と名づけることとすれば、今後の学校図書館や公民館図書室は地域社会における産業図書館としての一面を備えるものでなければならない。そしてこの産業図書館には図書ばかりでなく、産業の振興に役立つ資料や視聴覚教材が多数備えられ、放送聴取の指導もあわせ行なわれて、青年学級や婦人学級に開放されなくてはならぬと思うのである。

あ と が き

あしかけ4年をついやして試みた仕事であるが、微力のため、貧しいできばえに終ってしまったことを、御協力いただいた方々にお詫び申し上げたい。

本稿を終えるにあたり、終始懇切な御指導と激励の言葉をいただいた前北海道大学教授岡清男先生に深く感謝の意を表したい。

また、この研究を進める上に、八雲町教育委員会の加藤慎一教育長、大島日出生教育課長をはじめ、教育委員会、公民館、町役場の大勢の方々に大変お世話になった。

とくに大島教育課長には前後3回の調査に際して、資料の蒐集や青年学級その他各方面との連絡等ほんとうに面倒をみていただいたのである。

八雲農協太田正治、農業改良相談所、都築重雄（現大野町渡島家畜経営指導所勤務）両先生からは、有益な御助言、貴重な資料を多数いただいたことに厚く御礼申し上げます。

大新青年学級では茂木英一君はじめ学級生諸君の熱心な協力を得たことに感謝している。八雲中学校、八雲保健所、八雲漁協、徳川産業株式会社からも、いろいろ便宜をはかっていただいた。

また、終始御後援をいただいた朝日新聞北海道支社桶本正夫広告課長に謝意を表したい。

なお、この研究は日本読書学会・北海道科学研究費補助によって便宜を得たことを附記しておく。

◇参 考 文 献

1. 農林省農林水産技術会議事務局・農林省寒冷地農業振興対策室編「北海道農業地域区分結果概要」（昭和34年）
2. 農山漁村文化協会「農民と読書—農村読書調査の報告」（昭和35年）
3. 佐々木隆介「北海道の中・高校・公民館等における産業図書の利用に関する調査」（「北大教育学部紀要第8号」昭和37年）
4. 北海道教育委員会「北海道の青年学級」（昭和37年）
5. 北海道教育委員会「北海道実験青年学級実施報告書（昭和33, 34年度）」
6. NHKサービス・センター「北海道ラジオ農業学校テキスト」（昭和37年）
7. 北海道農務部「北海道ラジオ農業学校実施要領並びに関係資料」
8. 北海道農務部「農業技術普及資料（第5巻第1号）」（昭和36年7月）
特集＝農村青少年教育のすすめ方と北海道ラジオ農業学校指導の手引＝（1）本道における農村青少年の現状と問題点（2）農村青少年のプロジェクト活動について（3）北海道ラジオ農業学校学習指導要領（4）ラジオ農業学校現地集合研修の考え方とすすめ方（5）ラジオ農業学校学習評価のための技術競技について
9. 八雲町役場「八雲町勢要覧」（昭和36年）
10. 八雲町役場「昭和33年八雲町農業要覧」
11. 八雲町役場「営農計画書」並びに「営農設計の手引き」
12. 八雲町農業協同組合「酪農生産拡充5ヵ年計画」等に関する諸資料
13. 八雲町公民館「公民館のあゆみ」
14. 八雲町教育委員会「大新青年学級」第1集、第2集（昭和33, 34年）
15. 吉田十四雄「酪農と八雲」（雑誌「農業北海道」昭和35年）